LIGHT OF LIGHT

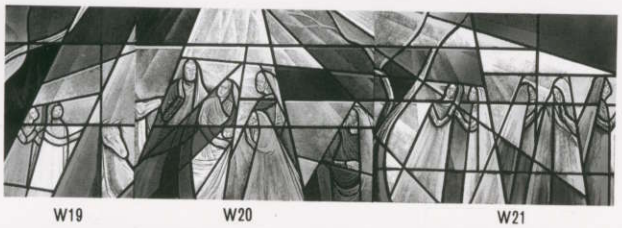
The Stained Glass
of
Shoin Women's University
Chapel

松蔭女子学院大学と短期大学が、現在の六甲キャンパスに移転し、総合学舎を建設したのは昭和55，56年のことでした。学舎建設にあたって、われわれは21世紀を展望して教育研究諸施設の美的・機能的充実をはかると同時に、キリスト教主義による学院建学の精神を具現化する中心的存在として、チャペル建立―厳密には旧青谷学舎構内にあった旧チャペルの再建―に全力を注ぎました。新キャンパスの構想と学舎群の設計が進められるにつれて、チャペルは正門に近い学園生活の中心部に位置すること、鐘楼にはカリヨンを設けること、窓はスティンドグラスとすること、パイプ・オルガンは18世紀フランス式とし、その音響が、ヨーロッパのすぐれた教会・聖堂のようなバランスのよい残響をもつ会堂を設計すること、などが次々に決定されました。

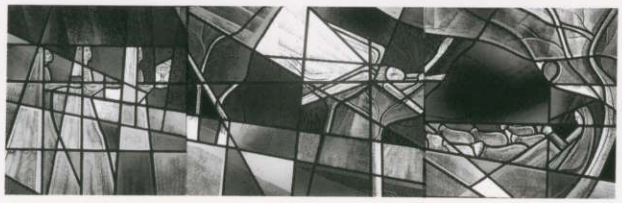
本学のスティンドグラスは、チャペルの会衆席から天を見あげる位置に、チャペル上部をとりまくように、聖書絵巻を展開しています。その技法は、ヨーロッパ中世の伝統を承継するもので、パイプ・オルガンとともに本学院の貴重な文化資産です。このたびそのスティンドグラスの全容を公刊することをこの上ない喜びとしています。

松蔭女子学院理事長　友 枝 重 俊

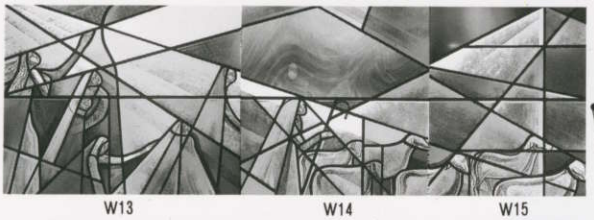
■スティンドグラス配置図（西側）



W19　W20　W21

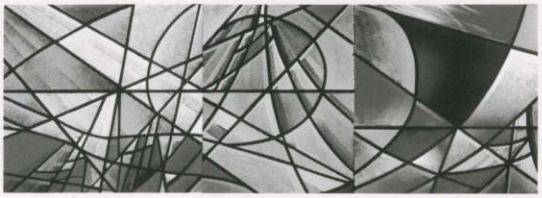


W16　W17　W18



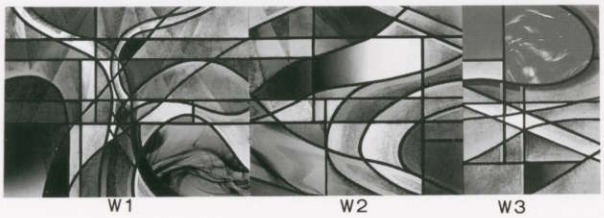
W13　W14　W15

W10　W11　W12



W7　W8　W9

W4　W5　W6



W1　W2　W3

W22　W23　W24

W25　E25

- ●スティンドグラス高さ　76cm
- ●スティンドグラス長さ　43.50m
- ●スティンドグラス設置高さ　10.84m

スティンドグラス長径　1m 55cm
スティンドグラス短径　1m 15cm

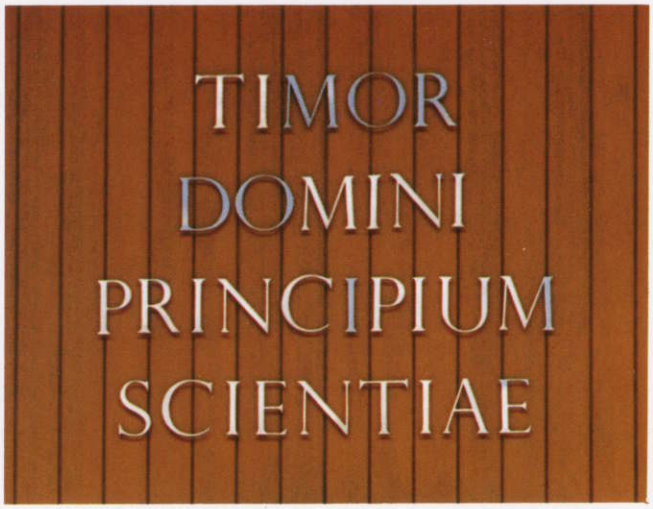
ヨーロッパを訪れた人であれば、一度は必ず教会に足を踏み入れ、しばしの瞑想にふけったにちがいありません。そして例えばパリのノートルダムやケルンの大聖堂、あるいはまたシャルトルの大伽藍の中で、スティンドグラスの美しさに心を洗われる想いをされたにちがいありません。

神は光をこの世に送り、この世の暗闇に住む悪を追放すると中世の人々は考えました。そして「神は光である」という聖書の思想を、スティンドグラスを透過する光の色の束によって体現化しようとしました。スティンドグラスはとりわけ北フランスで大きく発展しますが、これは教会建築において、屋根の重量を壁ではなく、石柱で支えるという技法上の発展と関係しています。逆にまた窓への要求がこの新技法を促したともいえるでしょう。そして柱と柱との間の空間にスティンドグラスがはめこまれることとなったのです。したがって大抵の窓は縦長であるのが普通です。それに対し、松蔭のチャペルのスティンドグラスはその意味では異例です。屋根の重量を別の方法で支えることによって、屋根と壁との間に細長い窓空間が作り出されたからです。そのことが、従来の上から下へ、また下から上へというスティンドグラスの上昇・下降という方向に対して、横への動きを可能にしたのです。そのことは、図を日本的な絵巻物に構成することを可能にし、聖書の物語を歴史風に続けて叙述することを可能にしたのです。

ではこのチャペルのスティンドグラスの一つの「読み方」について述べましょう。「絵を読む」とは、イメイジがひきおこす果てし無い連想に「一つの」筋を与えることです。読み方は多様であり、そもそも筋など与えて読む必要などなく、感受すればよいという人があるかもしれません。それはそれでかまいません。　さて入口にたって、祭壇に向かえば正面は緑、左手は赤、右手は青が主色であることに気づくでしょう。スティンドグラスは色彩と線の芸術です。これらの色は何を意味するのでしょうか。青色は空、水の色であり、清い、聖なる、極みのない天、果てしなく続く海を意味します。赤は燃えさかる火、流れ滴る血を表し、緑は平和のシンボルです。線についていえば、総じて直線は安定を、曲線は不安定、混乱を表すと考えていいでしょう。

さて、東の窓から見てみましょう。神は混沌の海に向かって「光あれ」と語ります。斜めに走る直線は光でもあり、「光あれ」という神の言葉でもあります。ここでの青は空と水とを象徴します。その空に鳥が飛び、樹木の間に馬が走る。この馬が群れをなして、いつしかイスラエルの民を紅海に追いつめるエジプト軍の軍馬となり、そのエジプト軍馬は人馬もろとも海の水にのみこまれてしまいます。ここでの曲線は荒れ狂う水であり、この水をくぐることによって、イスラエルの民は苦難、暗黒、虚無から解放され、そして向こう岸に立ったモーセは手を未来に向けてつきだすのです。ここでは混沌から安定へ、闇から光へ、創造から未来へと導く神の恵みが語られています。次ぎに西側の窓の赤色はとりわけ天からの火、つまり蛇に誘惑され、神から逸脱した人間に対する神の怒りをしめしています。アダムとエバ、バベルの塔、ソドムとゴモラという物語を連ねていけば、それらは人間の心中に渦巻く悪に対する神の審判を表していることに気付くでしょう。曲線は人の心の激しい動揺を象徴しています。さて、東西が旧約聖書の世界であるのに対して、正面は新約聖書の世界です。青と赤との世界が緑によって止揚されています。新約は旧約を超えるものです。緑はここでは平和を表しているでしょう。貧しき人々、悲しめる人々に囲まれたイエスが正面に座し、人々を祝福しています。そしてそのイエスは神の救済の業、人間の悪の克服の徴しとして、南の窓の「アグヌス　デイ」（神の子羊）を遠くに見るのです。ここでイメイジは一応　完結したものと考えることができるでしょう。

ともあれ、作品はそれ自体で独立した存在であり、わたしたちに多くのことを語りかけてきます。ですから以上述べたことは多くの読み方のなかの一つの読み方にすぎません。みなさんひとりひとりが、ご自分でそのメッセイジを聴きとっていただきたいと思います。



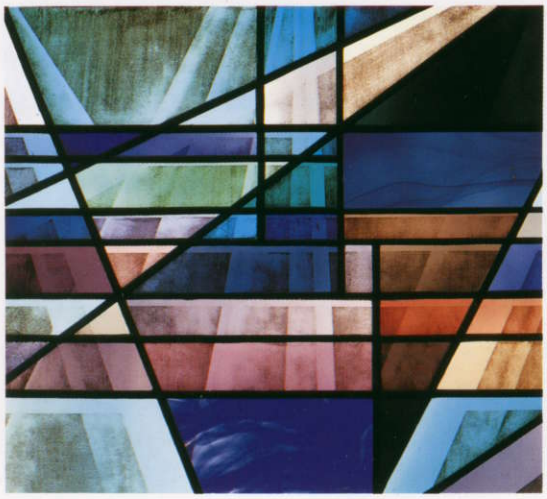
チャペルの入口に掲げられているこの言葉は、旧約聖書の箴言１章７節からの引用で、「主を畏れることは知識の初めである」という意味のラテン語です。SCIENCEつまりサイエンスは通常「科学」と訳される言葉ですが、今ではそのまま日本語になってしまっているほど、身近かな言葉です。しかし、この言葉の語源であるスキエンティアというラテン語は、現代よりももっと広い意味で使われていました。つまり知識、知恵、学問という意味をもっていました。現在ではサイエンスというと、時代の先端を行く学問を意味し、「科学」は普通の人とは縁遠いきわめて専門的なものと受け取られがちです。そして「科学者」つまり専門家がある主張をしますと、わたしたちは、専門家が言うのだから本当にちがいないと思って、無批判にその主張を受け入れてしまいます。このような学問の専門化という傾向は、ヨーロッパの場合ですと、ルネサンス（もしくは中世末期）以来の学問の展開と関係がありそうです。それ以後、人間にはとくに自然に関する知識への道が開放され、人間はあらゆるものを支配しうると考え、またその考えを実行に移してきましたし、これからもそれを続けて行くことでしょう。しかし、これは一つの思い込みではないでしょうか。人間の生活の仕組みが複雑になるにつれ、種々のものが分業化され、社会全体がいろいろの部品からなる巨大な機械になってしまいました。わたくしたちは、「モダンタイムズ」の中でチャップリンが演じたようにその中の小さな歯車の一つになってしまったのです。

では、わたしたちはどのようにして、このような情況から脱出できるのでしょうか。もちろん、「神を信じれば」片付くというような単純な問題ではありません。科学が片隅に追いやってしまった宗教を、科学の対極として、復権せよと、この標語は呼んでいるのではありません。ここでいうスキエンティア　つまり「知識」とは、ばらばらの細分化された知識ではなく、トータルな知識を指しています。そのような全体的な知識をもつことを、わたしたちは今ほど要求されている時代はないのです。しかも、このことと矛盾するようですが、そのような全体的な知識を獲るには、「神を畏れる」ことをまず第一にしなければならないと、この標語は主張しています。「神を畏れる」とは、人間の行動に限界を定めるものをもつということです。自らを超えるものをつねに念頭において、自らを吟味する。これが批判という働きの本質だとしたら、学問はつねに批判的でなければなりません。無批判な言葉ほど独善的なものはありません。そういった意味をこのチャペルの入口の言葉はわたしたちに語っているのです。

ところで１号館と図書館とを繋ぐ通路の外壁にSECUNDUM GRATIAM DEIという文字が銀色に浮び上っています。同じ言葉が１号館の玄関の大理石に彫られていますが、これらの文字は「神の恵みによりて」という意味のラテン語です。「神から賜った恵みによって、わたしは熟練した建築師のように、土台をすえた。…そして、この土台はイエス・キリストである」という新約聖書コリント人への第一の手紙３章10節からの引用です。現代人のわたしたちはよくhomo faber（創造する人）といわれています。たしかに人はいろいろのものを造ってきました。しかし、本当は「神の恵みによって」造りえたのだという自覚をわたしたちは失ってはならないのです。神の「光あれ」という意志によって、暗闇である混沌の中に光が差したと創世記の冒頭は述べています。いつも闇夜に落ち込もうとするわたしたちは、この神の意志と恵みによって支えられているのです。創られたものとしての自覚と感謝が、何かを創り出すことの喜びを倍加するでしょう。自らに批判的でありつつ、かつ積極的に生きるよう旧新約の二つの言葉はわたしたちに語りかけているのです。

だれも自分を欺いてはならない。もしあなたがたのうちに、自分がこの世の知者だと思う人がいるならその人は知者になるために愚かになるがよい。なぜなら、この世の知恵は、神の前では愚かなものだからである。「神は、知者たちをその悪知恵によって捕える」と書いてあり、さらにまた、「主は、知者たちの論議のむなしいことをご存じである」と書いてある。だから、だれも人間を誇ってはならない。

コリント人への第一の手紙３・18―21



光あれ

初めに神は天と地とを創造された。地は混沌としており、闇が淵のおもてをおおい、激しい風が水の上を吹き荒れていた。神は「光あれ」と言われた。すると光があった。

(創世記１章１―３節)

神が世界を創造されたとき、世界一体は真暗闇であり、秩序のまったくない、混沌の状態だったと、聖書の冒頭の句は述べています。従来の聖書で、「地は形なく、むなしく」と訳されている「トーフー・ワ・ボーフ」というヘブル語は、むしろ、「ぼうぼう」として把えどころのない、どろどろした状態を表わす擬声語なのであって、カオスを言い表わしています。しかも、水は逆巻き、激しい風がその上を吹き荒れているのです。ここで「激しい風」と訳したヘブル語の「ルーアハ・エロヒーム」も、従来の聖書では「神の霊」と訳されていますが、ルーアハは風、霊、いずれをも意味する単語です。またエロヒームはここでは神という名詞よりは、最上級を表わす修飾語としての機能をもっていると考えられています。ですから「神の霊」が静かに水の上に漂っていたのではなくて、「激しい風」が吹き荒れていたと読む方が正しいのです。

ところで、わたしたちは平常、確固とした世界の上に立って、生活していると考えています。しかし、本当にそうなのでしょうか。聖書はそう問いかけているのです。確かだと思っているこの世界が実は混沌の上に、かろうじて支えられているのであり、わたしたちの世界はいつでもたちどころに、このような状態に逆戻りしうるのだと、まず述べているのです。その世界はわたしたちの周りを囲む世界ばかりではなく、わたしたちの内にある世界をも指しているのです。

しかし、聖書はそこでは終りません。神は「光あれ」と語られています。何と慰めに充ちた言葉でしょう。夜が明けようとするその瞬間、真黒だった世界が濃い藍色に変化します。そのとき「光あれ」という言葉が慰めをもってあたりに響き渡り、光が漲り始めるのです。これは単なる気象上の説明ではありません。神は光あれと「語られた」のです。「語る」とは話者の意志の伝達です。混沌にひきずり込まれようとする世界、人間を神は「光あれ」という言葉によって救おうと意図されるのです。これはわたしたちに対する神の慰めの言葉です。

それはまた「わたしは世の光である。わたしに従ってくる者は、やみのうちを歩むことがなく、命の光をもつであろう」というイエスの言葉のなかに響いています（ヨハネ８・12)。わたしたちはこの慰めの言葉によって支えられた光の子として、たとえ死の蔭の谷を歩むとも、おそれる必要はないのです。

ひかりにあゆめよ　さらばふかき
みたまのまじわり　たえずぞあらん
ひかりにあゆめよ　さらばまたと
この世のけがれに　そまずぞあらん
ひかりにあゆめよ　さらばくらき
谷間をゆくとも　やすくぞあらん
ひかりにあゆめよ　さらば墓も
くちざるさかえの　門とぞならん
ひかりにあゆめよ　さらば消えぬ
ひかりのみかみは　こころにまさん

讃美歌　326番

善悪を知る木

「主なる神は人を連れて行ってエデンの園に置き、これを守らせられた。主なる神はその人に命じて言われた、「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう。」

さて主なる神が造られた野の生き物のうちで、へびが最も狡猾であった。へびは女に言った。「園にあるどの木からも取って食べるなと、ほんとうに神が言われたのですか。」

（創世記２・15—17，３・１）

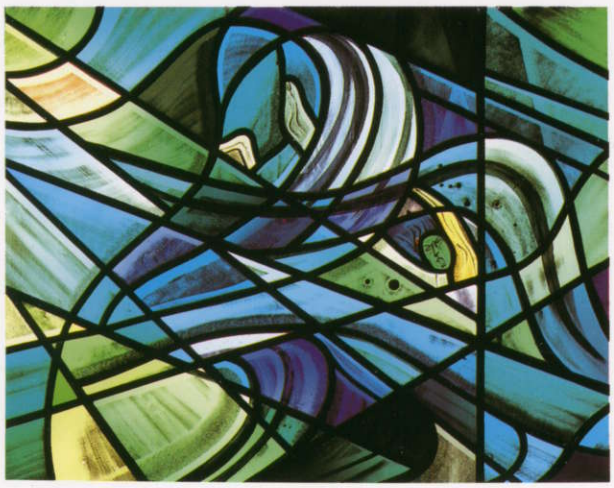
前回は、「光あれ」という神の言葉が、人間に対して恩恵を与えようという神の意志であること、つまり、神の言葉によってわたしたちが支えられていることについて書きました。今回は、それに対応する人間の側からの反応について述べようと思います。

最初の人間が土のちりで造られ、アダムと呼ばれていたこと、このことは、聖書の読者でなくとも、だれもがよく知っている物語です。しかし聖書の著者はただ単に民話的な人間の創造の物語を述べているだけではないのです。彼は「人」（アダム）と「土」（アダマー）という語呂合わせを用いながら、人間という存在がいずれは「土」に帰るはかない存在にすぎないことを強調しているのです。しかし一方ではまた、その土から創られた人間に、命の息が吹き込まれて、人が生きた者となったとも語っています。ここでも人間は創られた存在でありながら、そのままで、生きた者として、命の息が神から与えられているというのです。人間は土に帰る存在、つまり「死に至る存在」でありつつ、生きているのです。その最初の人間が、エデンの園に置かれたのですが、その園の中央に「命の木」と「善悪を知る木」とが立っていました。これは別々の樹というより、1本の樹と考えてよいでしょう。「善悪を知る」とは、ものの良し悪しを知るという道徳的なことではなくて、「全てを知る」というヘブル語の言い方ですから、人間には「善悪を知る樹」から木の実を取って食べること、つまり「全てを知る」ことが禁じられていたというのです。これは一体どういう意味でしょうか。神は全能であることを、自分のためのみに保有したのでしょうか。わたしたちは未知のことがあると、我慢できず、あらゆることを自分の支配下に置こうとして、努力します。自分にないものを手に入れようとします。それはそれで良いこともあるでしょう。しかし、争いになることがあります。戦いになることがあります。未知の克服は一方では良い働きをするのですが、同時にまた悪い面へと人を導くのです。よくも「善悪を知る樹」と名付けたものです。わたしたちはあらゆることを知ろうと努めます。しかし、その時わたしたちは全能になりえないことを自覚すべきだというのです。逆にわたしたちは全能になりえないからこそ、努力するのかも知れませんが、人間が全能になったとき、つまり神になったときほど、恐ろしいことはありません。人間には限界があることの方が自然というべきでしょう。

そしてそのような限界の存在を自覚することが知恵というものでしょう。旧約の賢者はこう歌っています。

知恵を求めて得る人、
悟りを得る人はさいわいである。
知恵によって得るものは、
銀によって得るものにまさり、
その利益は精金よりも良いからである。
知恵は宝石よりも尊く、
あなたの望む何物も、これと比べるに足りない。
その右の手には長寿があり、
左の手には富と誉がある。
その道は楽しい道があり、
その道筋はみな平安である。
知恵は、これを捕える者には命の木である。
これをしっかり捕える人はさいわいである。
主は知恵をもって、地の基をすえ、
悟りをもって天を定められた。
その知識によって海はわきいで、雲は露をそそぐ。

箴言３・13—20



魚

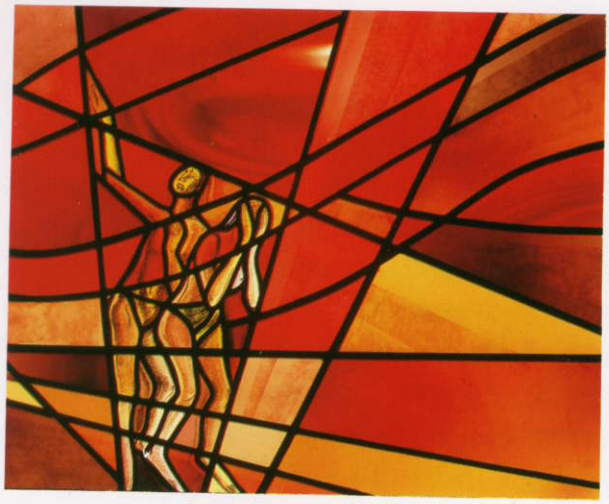
神はまた言われた、「水は生き物の群れで満ち、鳥は地の上、天のおおぞらを飛べ。」神は海の大いなる獣と、水に群がるすべての動く生き物とを、種類にしたがって創造し、また翼のあるすべての鳥を、種類にしたがって創造された。神は見て、良しとされた。

(創世記１・20―21)

イエスの教えが世に受け容れられるようになるまでには、多くの困難、ときには迫害さえも経なければなりませんでした。しかし、それにもかかわらず、イエスの教えはユダヤの地方から東西南北に、とりわけ当時のローマ世界へと拡まって行きました。まず以前からその地方に住んでいたユダヤ人同胞の間に、次いでその土地の人々の間に根を下ろして行ったのです。彼らは最初は官憲の眼を逃れて、例えばローマ市の周辺にあるカタコンベという地下墓地において、秘かに礼拝を守っていたようです。しかも毎回異なる場所に集まったと言われています。その集会場所を示す暗号として、よく魚の絵やパンの絵が用いられました。パンは、「私は生命のパンである」というイエスの言葉が示すとおり、イエス・キリストそのものを表わします。一方、魚はギリシア語でイクスースといいますが、実は「イエス・キリスト・神の・子・救い主」というギリシア語の五つの単語の頭文字を組み合わせると、このイクスースという言葉になるのです。もちろん、これは偶然の一致ですが、このシンボルは、五つのパンと二ひきの魚でもって、五千人の人々に食べさせたいというイエスの奇蹟（マルコ６・41以下）と結びついておりますし、「わたしについてきなさい、あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」というイエスの勧誘の言葉（マルコ１・17）とも結びついています。旧約聖書に登場する魚のうち、何といっても、預言者ヨナを呑み込んだ大魚がもっとも有名です（ヨナ書１・17以下）。人間を呑み込むほどの魚ですから、鯨のような大きな魚であったのでしょう。いったい鯨が魚なのか、また鯨だとして、地中海に鯨が生存していたのかどうかは定かではありませんが、ヨナはその大魚の腹の中に３日３晩いたと記されています。この大魚は怪物レヴィアタンと同じであり、カオス・混沌を表わします。ところで、このヨナの物語は、十字架にかかったイエスが黄泉（よみ）に下り、３日目に甦えったという出来事の預言であると、キリスト教会では解釈されてきました。さらにまた当時の占星術によりますと、魚座は、世の終りを示すと言われていました。ですから、イエスが誕生したときにベツレヘムに出現した星は、魚座に輝いていたとも言われています。これはベツレヘムに生まれたキリストがこの世に終りをもたらすと受けとられたからでしょう。さて、最初に引用した言葉の中の「海の大いなる獣」というのが、先に述べたヨナの大魚や、レヴィアタンにあたると思いますが、ここで述べられていることは、そのような怪物、つまりカオス・混沌もけっして神に対抗しうる存在ではないということなのです。闇の中に「光あれ」という神の言葉が響いたように、神は「良し」と宣告するのです。しかし、カオスが全くなくなってしまったわけではありません。ですから、わたしたちは詩篇詩人と同じように、「あなたのまことの救いにより、わたしを泥の中に沈まぬよう助け出してください。わたしを憎む者から、また深い水からわたしを助け出してください。大水がわたしの上を流れ過ぎることなく、淵がわたしをのむことなく、穴がその口をわたしの上に閉じることのないようにしてください」（詩69・14―15）と祈らざるをえないのです。しかし、それと同時にわたしたちは、神が「海をかわかし、大いなる淵の水をかわかし、また海の深き所を、あがなわれた者の過ぎる道とされた」ことを知っています（イザヤ書51・10）。ノアの大洪水も、エジプトから脱出するイスラエルの民の行手に立ちふさがる大海も最初は人々にとっておそるべき存在でした。それは、罪ある人類が死に陥ることを避けられない存在であることを示しています。しかし、神はノアに箱舟を送り、イスラエルの民のために、海水を押しとどめて民を救ったのです。人はバプテスマの水をくぐり抜けることによってはじめて新しい生命に甦ることができるのです。

わたしたちは　さかなのよう
かみさまの　あいのなかをおよぐ

（こどもさんびか　89）



鳥

すると、ふたりの目が開け、自分たちの裸であることがわかったので、いちじくの葉をつづり合わせて、腰に巻いた。彼らは、日の涼しい風の吹くころ、園の中に主なる神の歩まれる音を聞いた。そこで人とその妻とは主なる神の顔を避けて、園の木の間に身を隠した。主なる神は人に呼びかけて言われた、「あなたはどこにいるのか」。「園の中であなたの歩まれる音を聞き、わたしは裸だったので、恐れて身を隠したのです」 (創世記３・７―10)

アダムとエバが「善悪を知る樹」から実をとって食べて、最初にわかったことは、ふたりの目が開け、自分たちが裸であることでした。お互いが異性であることがわかり、２人はあわてて、いちじくの葉をつづり合わせて腰に巻いたというのです。ところで、わたしたちが使っているセックスという言葉は、ラテン語のセカーレ（分ける）の派生語といわれています。今「異性であることがわかった」と書きましたが、この「わかる」も「わける」「わかれる」と関連します。ものごとをはっきりと分別すること、ＡとＢとを判別すること、それが「わかる」ということの意味です。そして、そのことが人の場合にもあてはまります。つまり互いに異性であることがわかったということは、きわめて重要な意味をもっています。人は性に目覚めることによって大人になっていきます。人は自分とは異質な存在に出会うことによって成長するのです。ですから「裸であることがわかった」ということは、単に性的に目覚めただけでなく、本当の人間になったということです。人間はひとりひとりが集団の中に埋没してしまわない個別の存在です。しかし、個性がすぎると、互いにばらばらになってしまいます。神はアダムを創ったあと、「人がひとりでいるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう」と決心されて、エバを創り、アダムの伴侶とされましたが、それには意味があります。最初、人はひとりでした。文字どおり「ひとり者」で、孤独な存在でした。その人に、もうひとりの人が与えられ、人人となったことによって、彼らはもはや孤独な存在ではなくなりました。互いにふさわしい助け手として、連帯しあえる存在になったのです。人間とは「人の間」と書きます。人間社会は人ひとりでは成り立たず、人々がいて初めて成り立つのです。人間社会は自分以外の人が存在することを認めることで成り立っています。そういう存在として、わたしたちは創られているはずなのです。ところが現実はそうではありません。わたしたちが出会う相手を「ふさわしい」と思っているかどうかは、各自が胸に手を当ててみれば、すぐわかることです。「ふさわしい」と思うどころか、相手を利用し、自分だけが良い子になろうとします。ですから、アダムが神に叱られると、すぐに「あなたがわたしに連れそわせてくださった、あの女が食べよといって、くれたのです」と責任を女に転嫁してしまうのです。連帯どころか、責任を回避して言い逃がれをします。エバはエバで「実は蛇がわたしをだましたのです」と言っています。人間はこのように、いろいろな思いわずらいの中で生活しています。もちろん相手のことを思いやりをもって考える場合もありましょう。しかし大抵はそうでない場合が多いでしょう。それが人間の現実です。

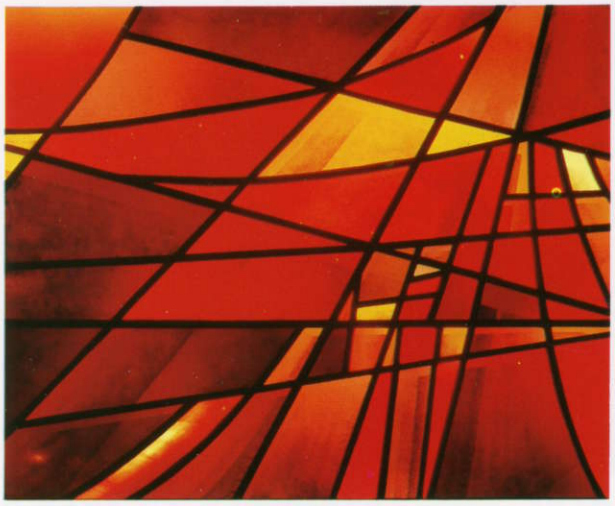
スティンドグラスに描かれた鳥を見てください。この鳥たちは天を自由に飛び回っています。まさに「自由」のシンボルなのです。イエスは「空の鳥を見よ。播きも、刈りも、倉におさめもしないのに、あなたたちの天の父は、それを養ってくださる」と言っています。われわれがあの鳥のように、自由に行動し、しかも連帯しあえる日は、どのようにして得られるのでしょうか。

バベルの塔

全地は同じ発音、同じ言葉であった。……彼らは言った、「さあ、町と塔とを建てて、その頂を天に届かせよう。そしてわれわれは名を上げて、全地のおもてに散るのを免れよう」。時に主は下って、人の子たちの建てる町と塔とを見て、言われた、「民は一つで、みな同じ言葉である。彼らはすでにこの事をしはじめた。彼らがしようとする事は、もはや何事もとどめ得ないであろう。さあ、われわれは下って行って、そこで彼らの言葉を乱し、互い言葉が通じないようにしよう」。こうして主が彼らをそこから全地のおもてに散らされたので、彼らは町を建てるのをやめた。これによってその町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を乱されたからである。（創世記・11・4―9）

天地創造の初めに語られた「光あれ」という神の「言葉」は、この世を創り、支える神の意志であることを前に述べました。今回はその写しとしての人間の「言葉」について述べようと思います。人間は神の似像として創られましたから、この「言葉」の使用も許されました。ですからわたしたち人間は言葉によって自分の意志を他の人に伝えることができるのです。しかし、そのようにして伝えようとする意志、情報が必ずしも良いものばかりであるとはいえません。良からぬたくらみも言葉によって伝えられます。おそらく、わたしたちの身体の中には、「善悪を知る樹」の実の悪い部分がまだ消化されずに残っているからかもしれません。しかしまた、自分では良いつもりで語った言葉が人を傷つけてしまうこともあります。そしてそれを恐れて黙ってしまうと、さらに拍車がかけられて、事態はより悪化する場合もなきにしもあらずです。「智に働けば角が立つ、情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい」と漱石は「草枕」の冒頭部分で述懐しています。なぜこのような住みにくい世の中になったのでしょうか。冒頭に掲げた創世記の「バベルの塔」の話は、その辺の事情を、バベル（バビロン）と「乱す」（バラル）という語呂合わせを巧みに用いながら、説明しようとするのです。メソポタミアの平野部に造られた都市バビロン、その中央にこの都市の守護神マルドゥクを祀る神殿の塔が高く聳え立っていました。約90メートル四方の正方形の基壇の上に、テラス式に六層の壇が築かれ、その高さは約90メートルもあったそうです。当時の人々には、天にも届くように見えたにちがいありません。この町の名「バベル」はバブ・イリつまり「神の門」、神の座します天と地とを結ぶ入口という意味でした。神の加護を願って、人間は初めはささやかな祭壇を築いたに違いありません。例えば、神の使の夢を見たヤコブが、枕としていた石を立てて記念としたように。しかし人間はその塔を高く高く積み上げて行ったのです。あたかも人間が天にある神の座に迫ることができるかのように。そこには人間の物質文明に対する憧憬と自信とが表わされています。しかし、それだけではありません。創世記の著者は、この塔の建設には「言葉」が大きな役割を果たしたと言っています。言葉、つまり観念です。物質文明だけでなく、人間は観念の世界をも膨張させて行くのです。神からの「言葉」を待つのではなく、自ら神の世界に侵入しようとするのです。いや、神すらも造り出そうというわけです。人間がこの世の創造主になろうとしました。そこで神はこのような人間の傲慢を撃ち砕かれるのです。神は実は「塔」にしばられる必要のない自由な方だからです。

ヨハネ福音書はイエス・キリストの誕生を「言葉が肉体となった」（1・4）と述べています。わたしたちの言葉は、神の言葉によって砕かれねばなりません。それがクリスマスの重要な意味なのです。



ソドム・ゴモラに下る天の火

主は硫黄と火とを主の所すなわち天からソドムとゴモラの上に降らせて、これらの町と、すべての低地と、その町々のすべての住民と、その地にはえている物を、ことごとく滅ぼされた。　(創世記19・24—25)

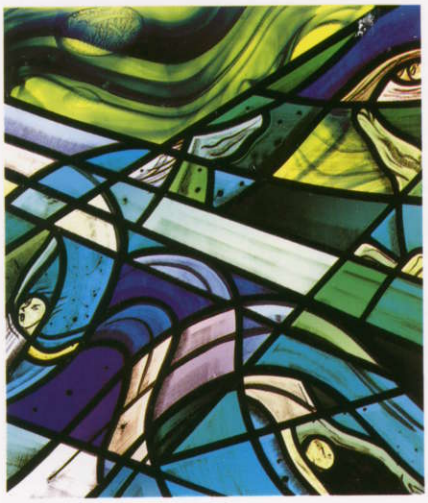
イスラエルの始祖であるアブラハムは、妻のサラとおいのロトを連れてハランからカナンに向って旅立ちました。途中ロトはアブラハムと別れ、ヨルダンの低地の町ソドムに住むことにしました。この低地はエデンの園のように良く潤っていたようですが、ソドムに住む人々は悪く、神に対して、はなはだしい罪人であったと録されています。
ソドムは死海の南の沿岸に位置していた豊かな町であったようです(現在は死海の水中に没していると考えられています)。この付近の山からは岩塩が採れますし、一般の海水よりも6倍近い塩の含有量をもつ死海から人々は塩を作り出しました。塩は人間の食生活に不可欠のものであることは、今も昔も変りません。ですから、ソドムもこの塩の売買で賑う町であったにちがいなく、多くの人々が集まって来たことでしょう。ロトもその賑いに牽かれて、ソドムに移り住むことにしたのかもしれません。物資の集散の中心点である町は、近隣の村々の中心となり、そこでは活気のある生活が営まれます。しかし、町に富が蓄積され豊かになってくると、その財力でもって周辺の地域を支配するようになります。それと平行して町でも（あるいは町においてこそ)、富の分配が公平に行なわれないで、人々の間に貧富の差が大きくなっていきます。ソドムもその例外ではありませんでした。「ソドムとゴモラの叫びは大きく」、その叫び声は神のいる天にまで届いたようです（創世記18・20)。この叫び声は、圧迫されている人々の救いを求める声であるかもしれません。あるいは、正義を神に求める声であるかもしれません。しかし、それにもまして、それらの声を掻き消してしまう支配者たちの歓楽の叫び声であったのではないでしょうか。酒場は町につきものです。

では、わたしたちにとって、町とはいったい何なのでしょう。人々は都会に集まってきます。都会には、その他の所では実現しない夢があるかのように。そのような夢はかなえられるでしょうか。リルケは「マルテの手記」の中で、大都会パリに住む人々の孤独を描いています。人間はたしかに本来孤独な存在です。ですから、人間はどこにいても孤独なのかもしれません。しかし、それだからこそ、人々は連帯し、助け合い、その孤独から脱出しなくてはなりません。人々は孤独から逃れようとして都会に集まってくるのです。しかし、都会は実際は人の孤独を癒すどころか、むしろ、逆にその孤独を顕わにしてしまうのです。人は自己以外の他を意識することによって、自己を知ることができます。ですから他を意識しない孤独な存在は、連帯のない、ばらばらの存在となり、そして、その結果、個性さえも失ってしまうのです。都会は人をのっぺらぼうな顔をもつ存在にしてしまうと、リルケは言っています。

弟アベルを殺したカインは地のおもてから追放され、地上の放浪者となり、エデンの東ノドの地に住み、そこに町を建てました（創世記4・13以下)。カインが人類最初の町を建設したというのですが、興味深いことに、この「ノド」は「流浪」という意味をもっています。ですから、町とは本来「流浪」的性格をもつことを聖書は強調するのです。都会とは、この大地そのものが、荒れ狂う混沌の上にあるように、そして、そのことを如実に示す虚構なのかもしれません。

アブラハムの熱心なとりなしにもかかわらず、ソドムとゴモラとは滅ぼされてしまいました。これは、わたしたちに対する厳しい警告なのです。

主はまた言われた、「ソドムとゴモラの叫びは大きく、またその罪は非常に重いので、わたしはいま下って、わたしに届いた叫びのとおりに、すべて彼らがおこなっているかどうかを見て、それを知ろう」。　(創世記18・20—21)



海に沈むエジプト軍

モーセが手を海の上にさし伸べると、夜明けになって、海はいつもの流れに返り、エジプトびとはこれにむかって逃げたが、主はエジプトびとを海の中に投げ込まれた。水は流れ返り、イスラエルのあとを追って海にはいった戦車と騎兵およびパロのすべての軍勢をおおい、ひとりも残らなかった。しかし、イスラエルの人々は海の中のかわいた地を行ったが、水は彼らの右と左に、かきとなった。

(出エジプト記14・26—29)

古いエジプトの記録によりますと、とりわけ飢饉の際には多くのイスラエル人が牧草地を求めて、エジプトのナイル河下流の地方に移動して行きました。創世記38章以下のヨセフ物語は、エジプトに売られて行ったけれども、その知恵と努力によって大臣になったヨセフと、食糧を求めてエジプトに下っていった彼の兄弟およびその父ヤコブとの再会にいたるまでの紆余曲折を美しく描いています。しかし、このような成功は万が一の出来事であったにちがいありません。その後の物語が示すように、ほとんどの人達は奴隷となって生活するより他になかったからです。彼らは新しい町の建設に駆り出され、しっくいこね、れんが作りなどの重労働につかされたと、出エジプト記１章は述べています。そこで彼らはエジプトからの脱出を決意します。最初はパロとの交渉を通じて合法的に行ないますが、ただで使用しうる労働力源をパロが簡単に手放すことはありません。あとは実力行使のみです。そしてある夜彼らは決行します。しかし、彼らにできることは逃亡しかありません。彼らはエジプトの守備兵がいる街道を避けて、海べの道を選びました。「奴隷逃亡」の知らせはいち早く王に伝わり、王は追討軍を編成し、イスラエル人を追います。徒歩と馬とでは勝負は明らかです。しかし、そこに奇跡がおこったと聖書は述べています。エジプトの戦車の騎兵とが海水に呑み込まれてしまったのです。そのことをイスラエルの人々は次のように歌っています。

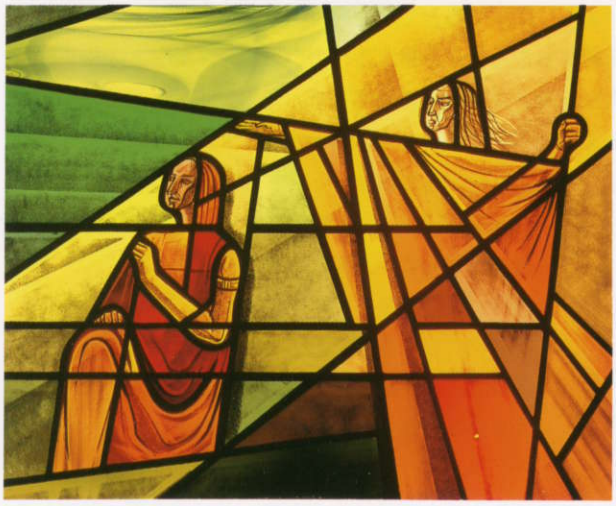
「主にむかって歌え、
彼は輝かしくも勝ちを得られた
彼は馬と乗り手を海に投げ込まれた
主はいくさびと、その名は主
彼はパロの戦車とその軍勢とを海に投げ込まれた
そのすぐれた指揮者たちは紅海に沈んだ
大水は彼らをおおい、彼らは石のように淵に下った」

イスラエル人はただ逃げるのみで、エジプト軍に対抗しうる手立てはありませんでした。ですから、エジプト軍が海水に沈んだことはまさに神による救いであり、奴隷の家から脱出できたのは、神の導きによるのだと、彼らは信じたのです。イスラエル人が最も重要視する「十戒」の冒頭に「わたしはあなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である」と述べられています。イスラエルの神は、いわば「脱出共同体」の神でした。つまり、弱者の希望の神だったのです。エジプトで奴隷であった人々は、まだ烏合の衆であったかもしれません。それがこの神を中心に「共同体」を形成して行ったのです。弱者が自立しうる共同体が目指されました。しかし、残念ながら実際はそうはなりませんでした。王国時代になると、弱者は強者に変身してしまったのです。このことを後の時代の預言者たちは強く批判しつづけました。

スティンドグラスをよく見て下さい。最初は数頭の馬が自然な姿で走っています。それが戦車をひく馬に変身します。そして、結局は海に呑み込まれてしまうのです。それにもかかわらず、ソロモン王は多くの馬を輸入し、軍備を拡大するだけでなく、戦車に仕立てて近隣の諸国に輸出したといわれています（列王紀上４・26)。しかし、その栄華も一瞬のものでした。

弱者が自立しうる共同体とは何でしょうか。紀元前８世紀の預言者ミカはこう提言します。

「彼らはつるぎを打ちかえて、すきとし、
そのやりを打ちかえて、かまとし、
国は国にむかって、つるぎをあげず、
再び戦いのことを学ばない」　（４・３）



カナンの地を指すモーセとヨシュア

「わたしのしもべモーセは死んだ。それゆえ、今あなたとこのすべての民とは、共に立って、このヨルダンを渡り、わたしがイスラエルの人々に与える地に行きなさい。あなたがたが足の裏で踏む所はみな、わたしがモーセに約束したように、あなたがたに与えるであろう。わたしは、モーセと共にいたように、あなたと共におるであろう。わたしはあなたを見放すことも、見捨てることもしない。強く、また雄々しくあれ。」

（ヨシユア記１・１－５）

エジプトを脱出したイスラエルの民は、そのまま即座にカナンに入ることができたのではありません。その機会はたしかに与えられたのですが、イスラエルの民は、斥候の報告に怖気づいて、カナン入国を躊躇しました。その結果、彼らは40年の長きにわたって荒野の中を放浪する羽目になったと民数記は述べています。その間、彼らはあるときは水不足から、あるときは食料不足から、ねを上げ、不満の声を神に向かって上げました。「ああ、肉が食べたい。きゅうり、メロン、ねぎ、たまねぎ、にんにくが眼に浮ぶ。エジプトではいつも、ただで魚を食べていたのに。ここでは、どこを見回しても、マナばかりだ。とても喉には通らない。」（民数記11・４－６）エジプトに旅行した古代ギリシアの歴史家ヘロドトスの報告によれば、大根、たまねぎ、ねぎ等はピラミッド建設の作業にかり出された奴隷たちの食料であったといいますから、そのような食料すら事欠く状況であったのかもしれません。そして、このような荒野生活よりも、エジプトにおける奴隷生活のほうが、まだましだったと考え、彼らは「わたしたちはひとりのかしらを立てて、エジプトに帰ろう」と計画したのです。たしかにエジプトでの生活は「肉なべのかたわらに座し、飽きるほどパンを食べられる」ものであったかもしれません。つまり、なにがしかの生活の安定は与えられていたでしょう。しかし、それはまったく自由のない生活であったはずです。そのエジプトに帰ろうとすることは、後向きの態度としか言いようがないでしょう。このような姿勢に対して、モーセはひたすら前向きの冒険の姿勢を崩さずに、カナンへの道を進むのです。しかしながらこのモーセは無念にもカナンをヨルダン川の向うに臨みながら亡くなります。その意志を継いでイスラエルの民をカナンに導いたのは、モーセの従者であったヨシュアでした。彼にも「わたしはあなたと共におるであろう」という神の約束の言葉が与えられます。この言葉は、羊飼が羊を守り、安全な場所へと導いて行くように、神が歴史の中でわたしたちとともにおられて、わたしたちを導き守護して下さることを意味しています。そして、その約束とともに神はわたしたちに対して「強く、かつ雄々しくあれ」と求められるのです。これはどういう意味でしょうか。単に勇猛果敢であれといっている訳ではありません。たしかに最初の時には民には勇気が欠けていました。しかし実は自分たちの前にいる敵に立ち向う勇気だけではなく、自分の中にあるエジプトへの立ち帰り、過去との繋がりを立ち切る勇気が欠けていたのでした。未知に対する不安は、既知のものに対する想起が大きければ大きいほど、つのるものです。イスラエルの民は、エジプトへの帰巣心と訣別するために、40年の間、荒野で試煉の生活をしなければなりませんでした。同じことはわたしたちにもいえるでしょう。新しいこと、未知に立ち向うためには、わたしたちは既知のものの上での安住から自分を解放しなければなりません。自分たちが引摺る過去と訣別する勇気が心要です。預言者はこう歌っています。

「お前たちは以前の事を想い出すな、
いにしえの事を考えるな、
見よ、わたしは新しい事をなす」

（イザヤ書43・18以下）

羊飼い

さて、この地方で羊飼たちが夜、野宿しながら羊の群れの番をしていた。すると主の御使が現れ、主の栄光が彼らをめぐり照したので、彼らは非常に恐れた。御使は言った、「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである」。

(ルカによる福音書２・７以下)

アドベント

人びとは空を見上げて
待っている
あそこから来るひとを
でも空からは
来はしない
見上げていても無駄なのだ
そうしているうちにあの人は
人びとの背後から
いらっしゃるのだ　　Ｆ・シュヴァーンエッケ

この世で最初のクリスマスの日、つまりイエス・キリストがこの世に生まれた夜、羊飼たちはいつもと同じように野宿をして羊の番をしていました。その当時のユダヤでは、新しい救世主が待ち望まれていました。したがって「われこそはキリストだ」と言って自分を売り込む偽キリストも現われましたし、「キリストは雲に乗って来るのだ」と言って、その到来の日を計算している学者もいました。時の王ヘロデも律法学者や賢者たちを集め、その日のためにあらゆる対策を立てていました。しかし、町の喧騒からは少し離れた馬小屋の中にイエスは誕生しましたし、そのことを最初に告げられたのは、王でも学者でもなく、野で羊の番をしていた羊飼でした。

このことは「神の子の誕生」という大いなる出来事が、秘やかになされたことを示しています。神はこの世にそっと入ってこられたのです。「神の子」イエスは、他の子供たちと同じようにこの世に生まれたのです。

わたしたちは自分の手で大いなる出来事をなそうとして、やっきになっています。そして、少しでも自分だけは成功者になりたいと思って、人をかき分け前に出ようとします。それは実は人を利用し、犠牲にしてしまうエゴイズムなのです。エゴイズムは自分だけが人で、他の者は自分と同じ人ではないと考えることです。つまり自分が神のようになってしまうことです。人間が神になること、そのことに対して逆にクリスマスは「神が人になった」と告げるのです。これは、人間は神になってはいけないという戒めの言葉であると同時に、人間は人間のままでよろしいという慰めの言葉でもあります。御使の言葉を聞いた羊飼いたちは、ベツレヘムに行って、幼な子に会い、神をあがめ、讃美しながら、帰って行ったと聖書は述べています。羊飼いたちはまた羊の番に野に戻ったのでした。わたしたちはありのままの人間として生き続ければよいのです。わたしたちはただイエス・キリストの誕生を称えるだけでよいのです。

祈りの声

わたしたちはあなたを探しません
わたしたちにはあなたが見つかりません
あなたが探し、わたしたちを見つけるのです
永遠の光よ

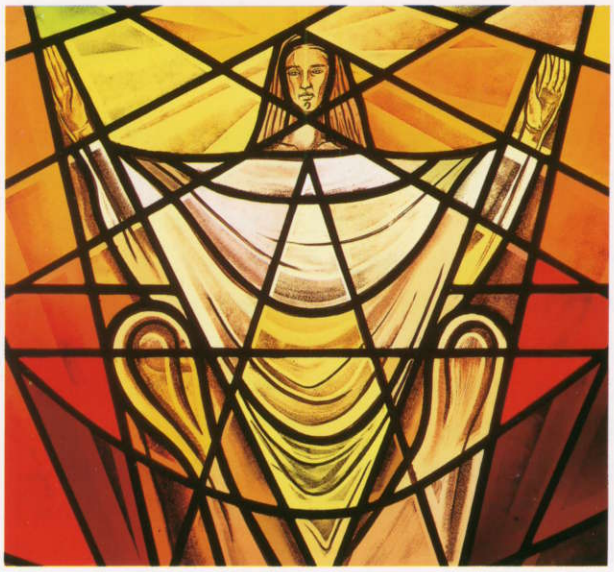
わたしたちはあなたを愛すること少なく
あなたに仕えることがつたないのですが
あなたはわたしたちを愛し、仕えてくださる
永遠の僕よ

おのれにかまけて　わたしたちは
身動きもせず
あなたがわたしたちを求めてくださるばかり
永遠の言よ

幼児は　飼葉おけのあなたをしかと
抱きもかなわね　わたしたちです
ただこのよい知らせはほんとうなのだと
言うだけで精いっぱいでございます

アルブレヒト・ゲース

詩は「もうひとつのクリスマスのうた」
(ヴォルフガング・フィートカウ編 小塩節訳) から



復活のイエス・キリスト

１週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおる所の戸をみなしめていると、イエスがはいってきて、彼らの中に立ち、「安かれ」と言われた。そう言って、手とわきとを、彼らにお見せになった。弟子たちは主を見て喜んだ。イエスはまた彼らに言われた、「安かれ、父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」　　（ヨハネによる福音書20・19—21）

イエスは十字架の上から天に向かって、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と大声で叫びました。弱い人、貧しい人、その他多くの人々のために続けて働くことを望んでいたであろうイエスにとって、十字架はその望みの挫折、終焉を意味します。イエスは神からの断絶、神の否定を感じたにちがいありません。その時のイエスの無念さがこの悲痛な叫び声の中に込められていないでしょうか。

ところでイエスの生前中には、彼の活動を助ける何人かの弟子がいました。しかし、その弟子たちも多くは、イエスが逮捕されると、イエスの運動から離れていってしまいました。あの一番弟子のペテロでさえ（彼はイエスのもとから完全に立ち去ることができずに、イエスの裁判のことが気がかりで、中庭で事の成り行きを陰から見守っていたのですが）、一時的にしろ「イエスを知らない」と否定しています。

今回引用した箇所も、イエスの処刑後、弟子たちがユダヤの民衆を恐れて、家の中に閉じこもり、戸をしっかりと閉めていたと書いています。彼らはイエスの弟子であったことが明るみになるのを恐れ、あるいは官憲の眼を逃れるため、外出することもできず、家の中に隠れていたのでしょう。

そこに復活のイエスが現われました。イエスは弟子たちに「今日は」と挨拶しています。なんとユーモラスな情景でしょう（ヘブル語の挨拶はシャロームですが、それを直訳すると「平安あれ」「安かれ」になります）。復活のイエスは、十字架上で悲痛な叫び声をあげたあのイエスとは全く変って、日常的な態度で「今日は」と声をかけるのです。しかし弟子たちは最初、その人がイエスだとはわからなかったようです。それでイエスは仕方なく十字架上で受けた傷痕を彼らに示したのです。さらにイエスは「ここに何か食物があるか」と言って、さし出された焼いた魚の一きれを、みんなの前で食べられました。魚は前にも述べましたように「イエス・キリスト・神の子・救い主」を表わすシンボルであり、また、霊的食物をも意味していますが、ここでは復活の出来事がけっして超自然的な奇跡ではなく、日常の生活のなかで起ることを述べようとしています。弟子たちはやっとそれがイエスであることがわかって喜びました。人々とともにいたあのイエスがあの当時のままで自分たちの前にいることがわかったのです。彼らには勇気が湧いてきたことでしょう。

あの偉大な解放者のモーセも、イスラエルの民の入るべきカナンの土地を望み見つつ、彼自身は入ることが許されず、自分の仕事を後継者のヨシュアに委ねざるをえませんでした。そのとき神はヨシュアに向かって、「わたしは、モーセと共にいたように、あなたと共におるであろう。わたしはあなたを見放すことも、見捨てることもしない。強く、また雄々しくあれ」と語られています。神はつねに民と共におられるのです。

復活のイエスもまた民と共にあるのです。弟子たちは「強く、また雄々しくあれ」という神の言葉を想い起こし、「父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」というイエスの命令を受け入れることができたのです。

かくして、十字架によって挫折してしまったと思われたイエスの活動が、弟子たちの間に甦り、引き継がれたのです。生前のイエスの振舞いが、弟子たちの振舞いとなったのです。これが復活の意味です。パウロは「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られたものである。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである」と述べていますが、わたしたちもまたイエスの業を自分の業として引き継ぐことによって、新たな存在へと造りかえられていくのです。

貧しい人達は幸いだ

あなたがた貧しい人たちは、さいわいだ。神の国はあなたがたのものである。

あなたがたいま飢えている人たちは、さいわいだ。飽き足りるようになるからである。

あなたがたいま泣いている人たちは、さいわいだ。笑うようになるからである。　　(ルカによる福音書6・20以下)

エデンの園でひとり働くアダムにエバが与えられたのは、「人がひとりでいるのはよくない」という神の意志によるものでした。この意志によって、人と人との交わり、人間社会が存在するようになったのです。しかし、それにもかかわらず、人々の交わりはうまく行きませんでした。神の意志に反して、人々は愛しあうよりも、憎しみ、反目しあうことのほうが多いからです。良くあるはずであった人間の社会が、人間の自己中心的な利益追求によって分化し、人々の間に階級が生じてしまいました。支配する層と支配される層、抑圧される層が生じたのです。古代エジプトはピラミッドの示しているように、その典型です。そのエジプトでイスラエルの民は奴隷として酷使されていましたが、モーセの時代にその抑圧された社会から脱出したのです。そして、この民にモーセを通して「十戒」が与えられました。十戒は人々の真の交わりのために神から授けられた基本法ですが、この十戒を中心とする新しい共同体ができたのです。さて、その十戒の一つには、「あなたはかつてエジプトの奴隷であったが、あなたの神、主が強い手と、伸ばした腕とをもって、そこからあなたを導き出されたこと」を忘れずに、安息日には「あなたの門のうちにおる外国人、あなたのしもべ、はしためをあなたと同じように休ませなければならない」と命じています（申命記5章12節以下)。自分たちはエジプトにおいて抑圧されていたのであるから、そのことを忘れずに、けっして抑圧する者になってはいけないと誡めているのです。しかし、このような誡めにもかかわらず、イスラエルには王国が誕生し、エジプトと同じピラミッド型の身分社会になってしまいました。

では、抑圧のない自由な社会を作ることはわたしたちには不可能なのでしょうか。わたしたちは諦めざるをえないのでしょうか。いや、可能なはずです。そのためには、わたしたちは、人を抑圧しないことに心がけるべきでしょう。そうすれば自由な社会が新しく誕生するはずです。わたしたちは、何か煩わしいことが身辺におこると、そこから逃れて、ひとりになりたいと思うでしょう。しかし、それは真の解決とはいえません。イスラエルの民はエジプトから脱出しただけではありませんでした。彼らは新しい共同体を建設したのでした。しかし、この共同体はつねに新しく自らを変革していかなければなりません。そうでなければ、いつも悪しき状態に逆戻りしてしまうでしょう。

イエスは、貧しい人々、飢えている人々、泣いている人々に向かって、「あなたがたは幸いだ」と言っています。彼らは自分のせいで、あるいは自ら好んで、そのような苦しみにあっているわけではありません。むしろ人間社会の歪みの犠牲者なのです。イエスはそのことを良く承知して、あえて「あなたがた貧しい人たちは幸いだ」と語るのです。この逆説によってイエスはわたしたちに変革を迫ります。これは「満腹した富める人々」に対する痛烈な批判です。わたしたちには用いるべき知恵が与えられています。抑圧支配する層と抑圧され支配される層の存在する社会をなくすために、わたしたちはこの知恵を大いに活用すべきではないでしょうか。

見よ、神の小羊

御使はまた、水晶のように輝いているいのちの水の川をわたしに見せてくれた。この川は、神と小羊との御座から出て、都の大通りの中央を流れている。川の両側にはいのちの木があって、12種の実を結び、その実は毎月みのり、その木の葉は諸国民をいやす。のろわるべきものは、もはや何ひとつない。神と小羊との御座は都の中にあり、その僕たちは彼を礼拝し、御顔を仰ぎ見るのである。彼らの額には、御名がしるされている。夜はもはやない。あかりも太陽の光も、いらない。主なる神が彼らを照し、そして、彼らは世々限りなく支配する。　（ヨハネの黙示録22・1－5）

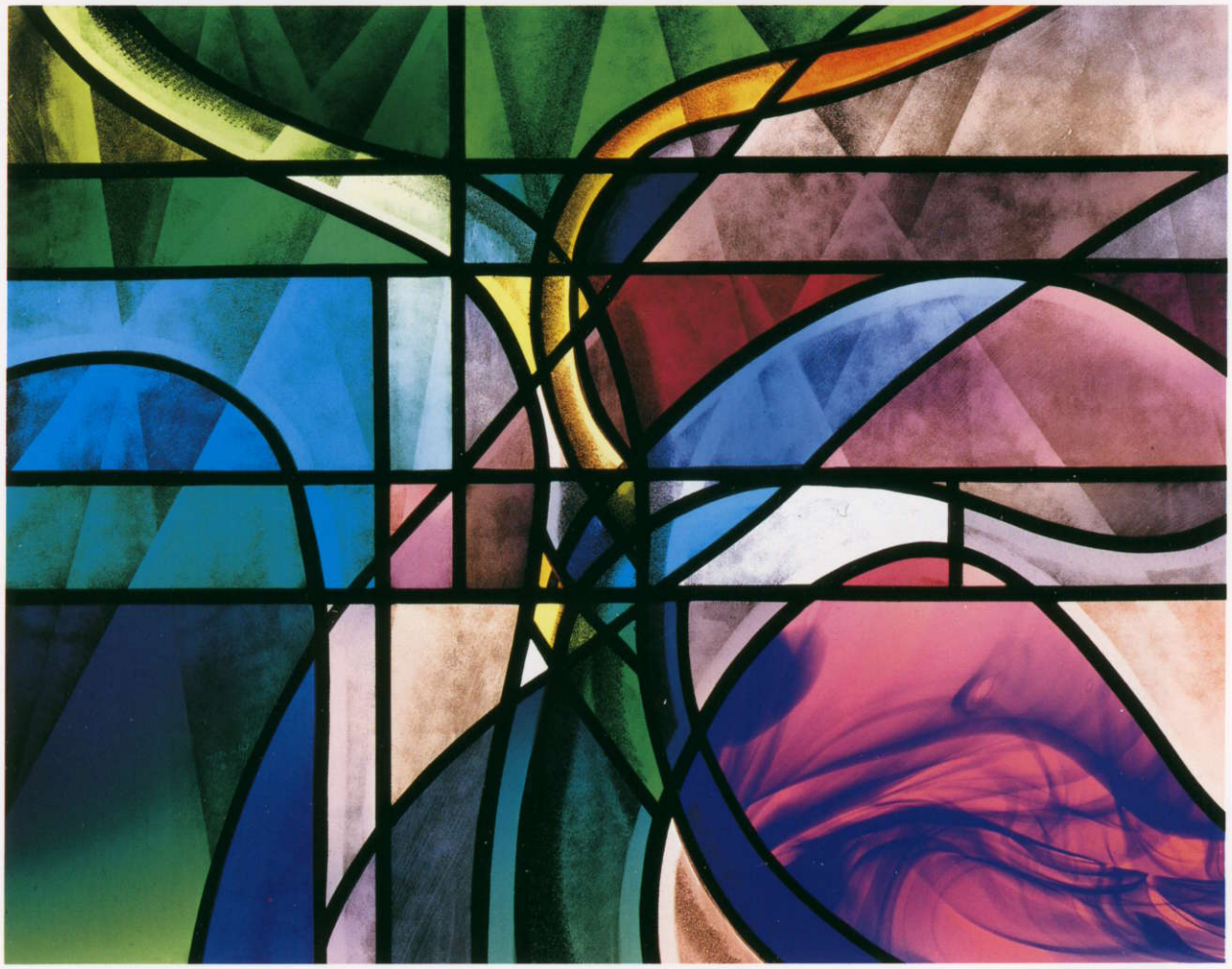
ここに引用した句は、聖書の最後の書の最終章に述べられていますが、聖書の最初の書である「創世記」の最初に述べられていた「楽園追放」の物語と対になっています。ここでは、「楽園回復」が述べられているのです。アダムとエバとがエデンの園から追放されて以来、園の入口は固く閉ざされたままでしたし、一方人々は流浪の旅人となりました。もちろん、「たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわいを恐れません。あなたがわたしと共におられるからです」と詩篇詩人が歌うように（23・4）、その旅は酷しい旅ではあっても、神の同伴したもう旅でした。いや、神御自身が旅人なのです。「あなたがたはわたしと共にいる寄留者、また旅人である」と述べられているからです（レビ記25・23）。そして、その旅の果てに、わたしたちは再び園に帰ることを赦されるのです。

驚くべきことに、この園には夜がありません。闇がないのです。わたしたちは夜のない一日を考えることができるでしょうか。わたしたちにとって、夜のない一日はむしろ苦痛ではないでしょうか。夜は身体の疲れを回復する休息の場でもありますし、心の傷を癒す貴重な時間でもあります。その意味でわたしたちから夜が奪われてしまうなら、わたしたちは一日も生きることができないのではないでしょうか。しかしそれはわたしたちの中に、闇に対応する部分があるからです。それゆえわたしたちは闇に魅せられてしまうのです。わたしは第１回目に、「光あれ」という神の恵みによって、わたしたちが支えられ、わたしたちを取り巻く闇の世界から分けられていることを述べました。しかし、その闇が今はまったく消え去っています。このようなことは可能なことなのでしょうか。

輝きに充ちた世界とは、不正・虚偽のない正しさのみの支配する世界でしょう。それにひきかえ、わたしたちの世界はどうでしょう。光と闇との交錯する世界です。したがって、この世界の中でわたしたちがなにほどかの正しさを行なおうとするとき、わたしたちは直ちに座礁してしまいがちです。しかし、それにもかかわらず、わたしたちは座礁を乗り越えて進まなければなりません。「輝きに充ちた世界」に向かって。この新しい世界は、単なる理想境としてわたしたちの向うに超然としてあるのではなく、たとえ夜に慰めを求めることがあっても、挫折することなく生きよという、わたしたちに対する神の要請として、わたしたちの前に迫っているのです。イエスもまた同じように、この神の要請に従って歩み続け、そして最後に十字架の死をとげざるをえませんでした。

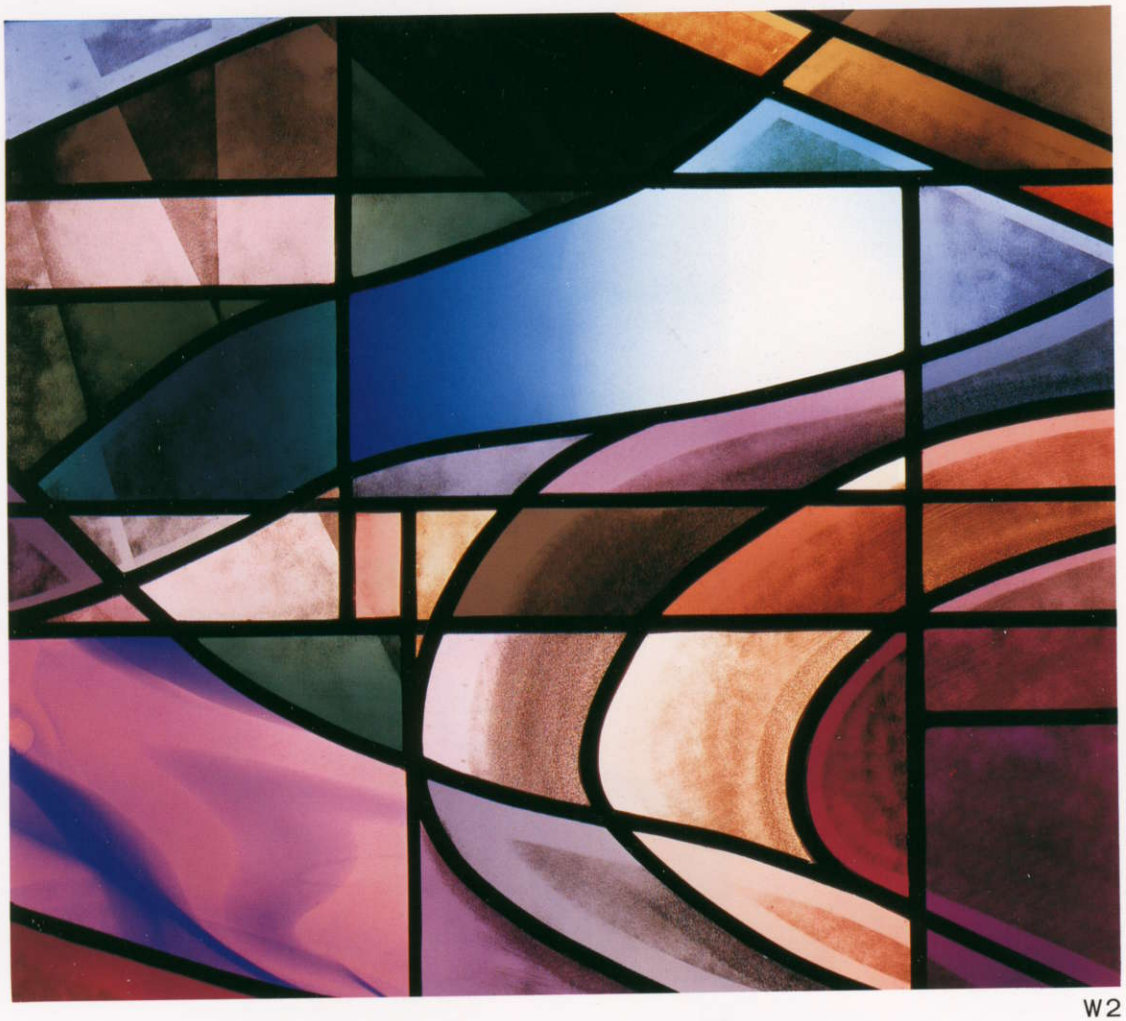
第２イザヤはかつて「われわれの不義のために砕かれ、懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれを癒した」小羊について歌いました（イザヤ書53章）。その苦難をうけた羊が今は栄光に包まれて、神とともにあると黙示録は述べています。この羊が「神の小羊」、イエス・キリストなのです。わたしたちもイエスと同じように「輝きに充ちた世界」に向かって歩もうではありませんか。

かみさまのあいは　しみとおる
わたしたちのこころに　ひのひかりのように
うみも　おがわも　いっしょに
さんびのうたを　うたおう
かみさまのあいは　しみとおる
わたしたちのこころに　ひのひかりのように
（こどもさんびか　88）



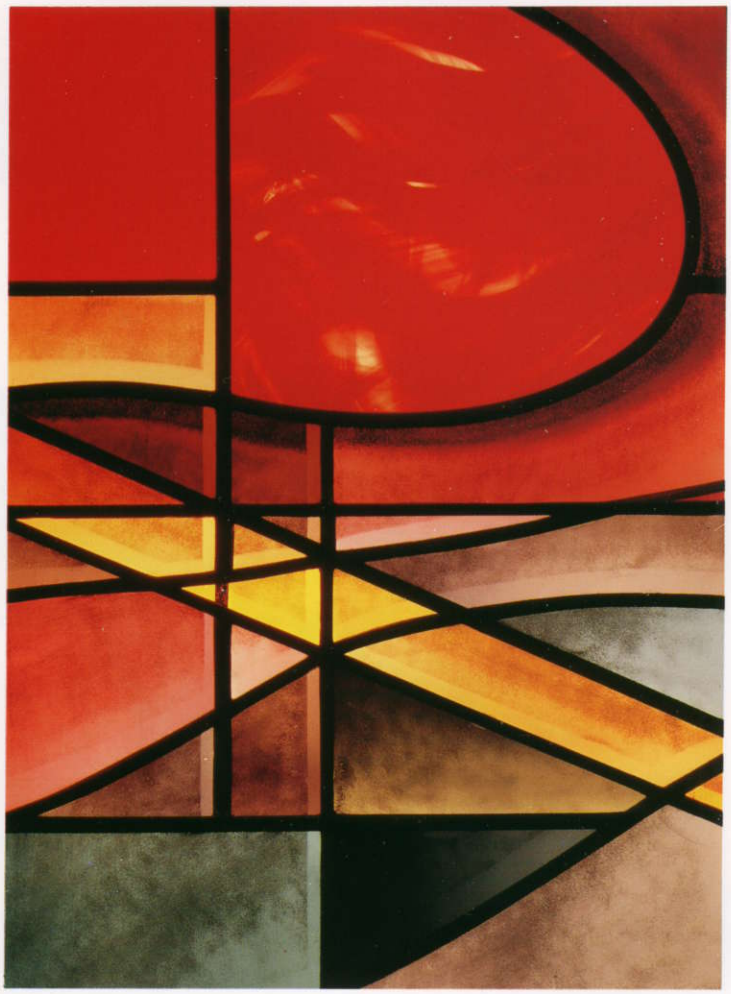
W1

主は園の中央に命の木と、善悪を知る木とをはえさせられた。



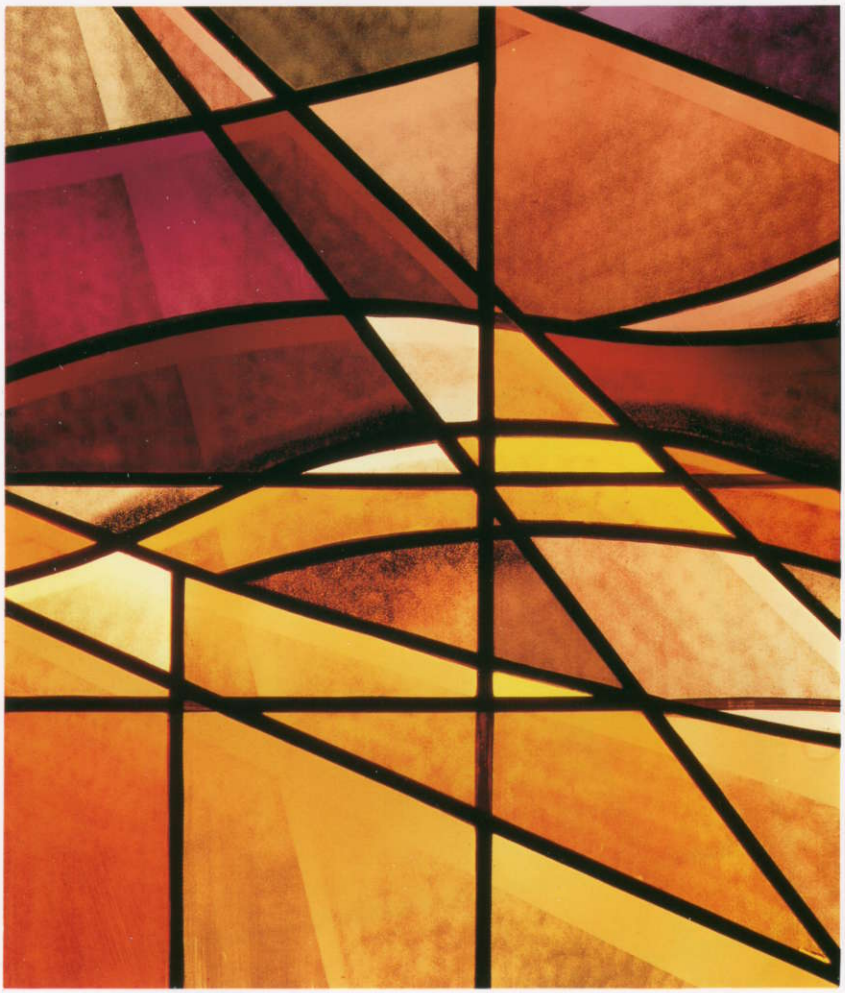
W2

In the middle of the garden he set the tree of life and the tree of the knowledge of good and evil.



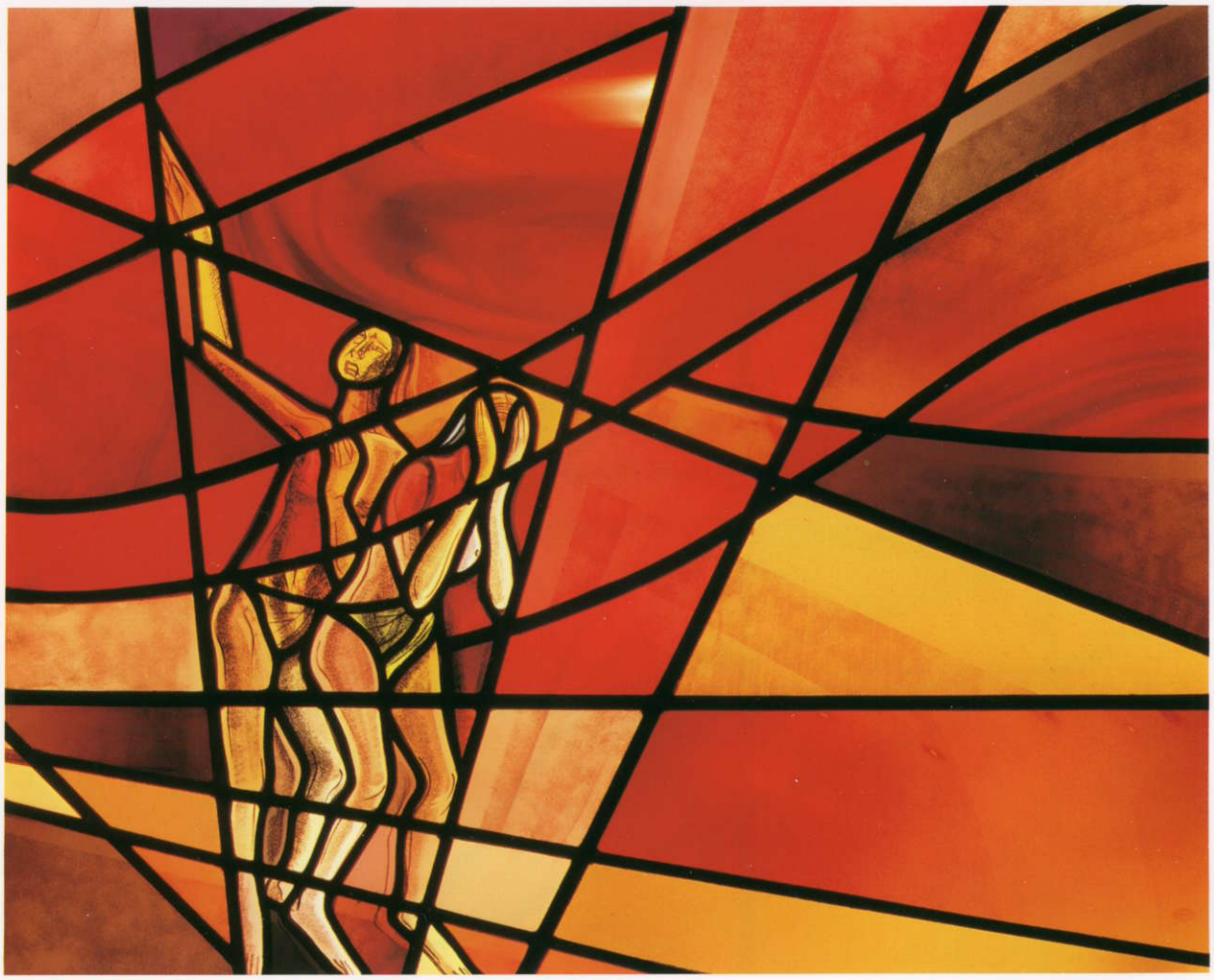
W3

あなたは土から取られたのだから、ついに土に帰る。



W4

You return to the ground, for from it you were taken.

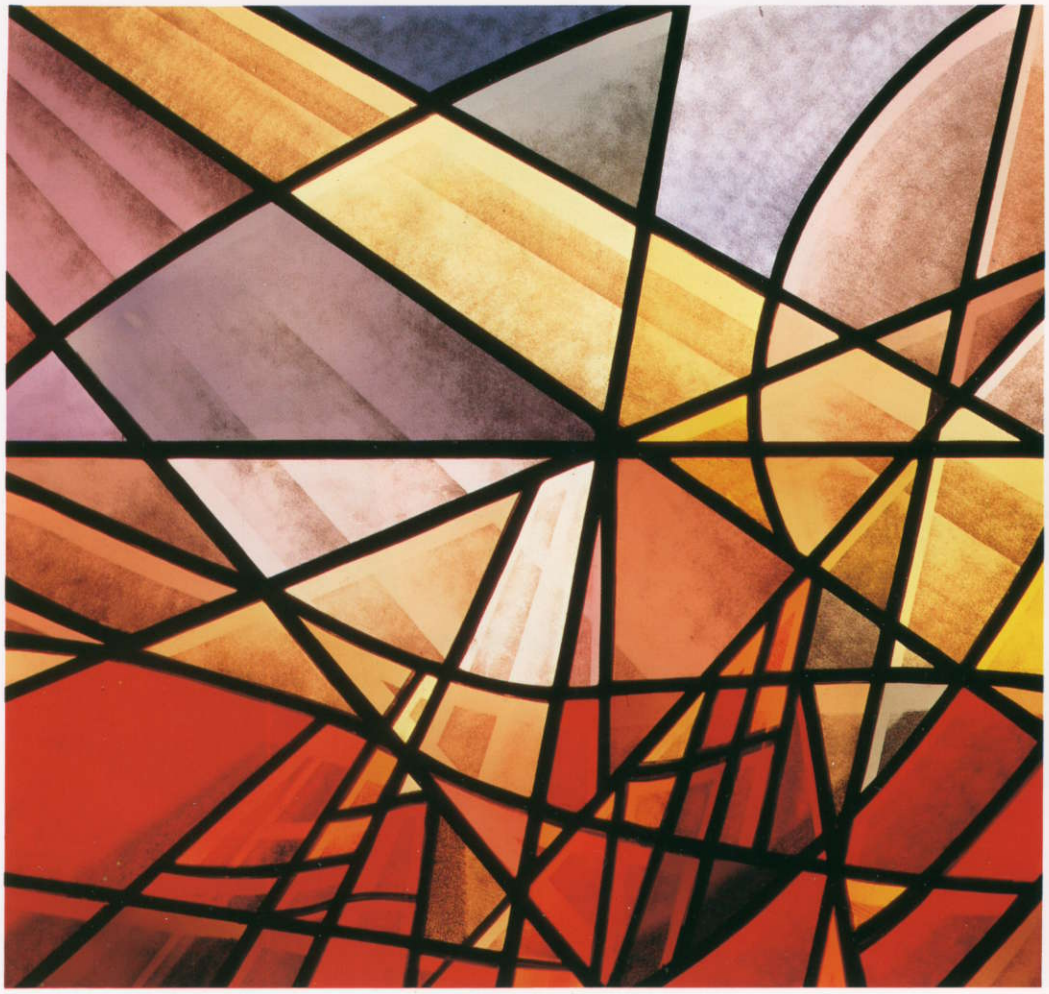


W5

神は人を追い出し、エデンの園の東にケルビムと回る炎のつるぎとを置いて、
命の木の道を守らせられた。

W6

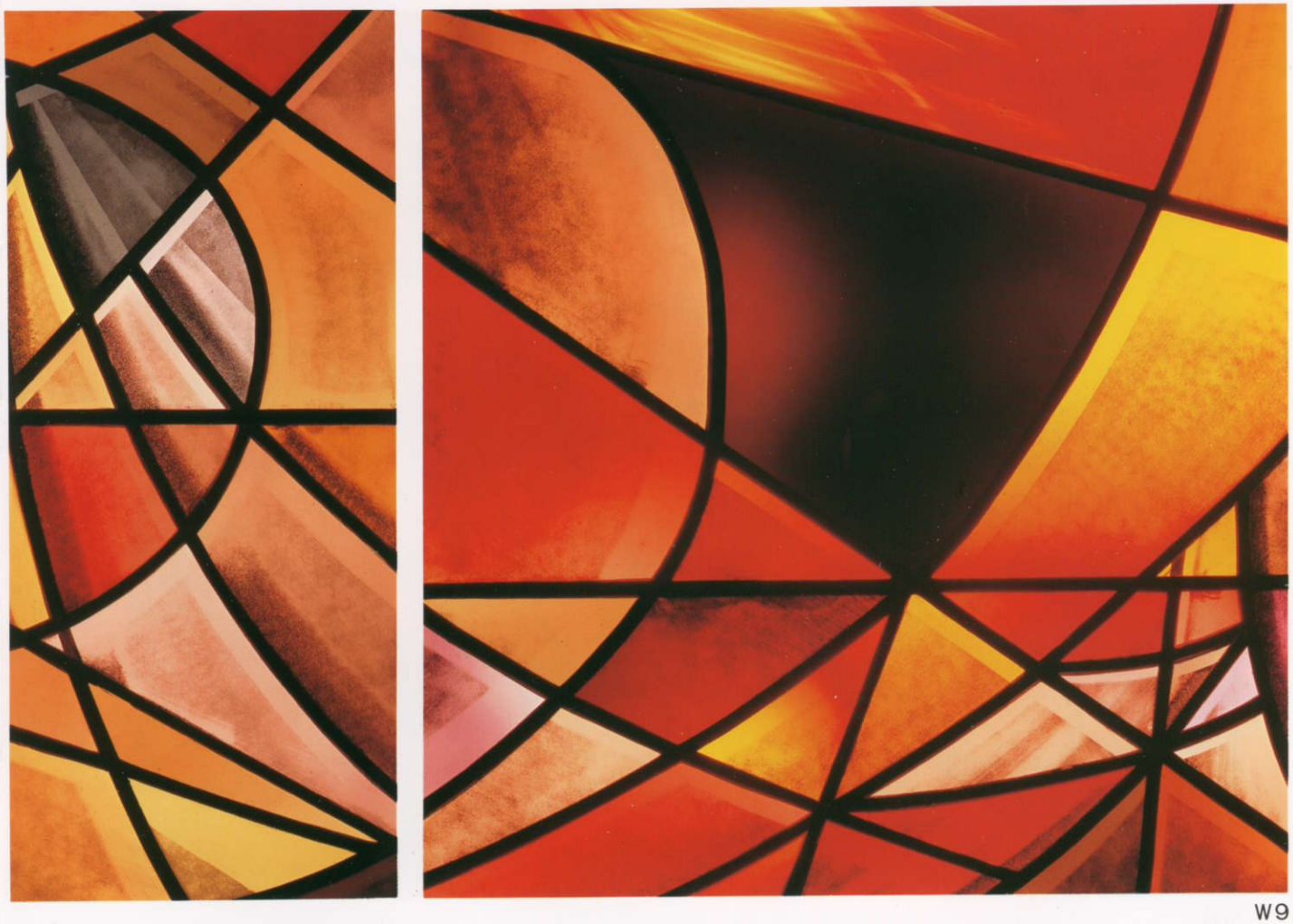
He cast him out, and to the east of the garden of Eden he stationed the cherubim and a sword whirling and flashing to guard the way to the tree of life.



W7

W8

さあ、町と塔とを建てて、その頂を天に届かせよう。



W9

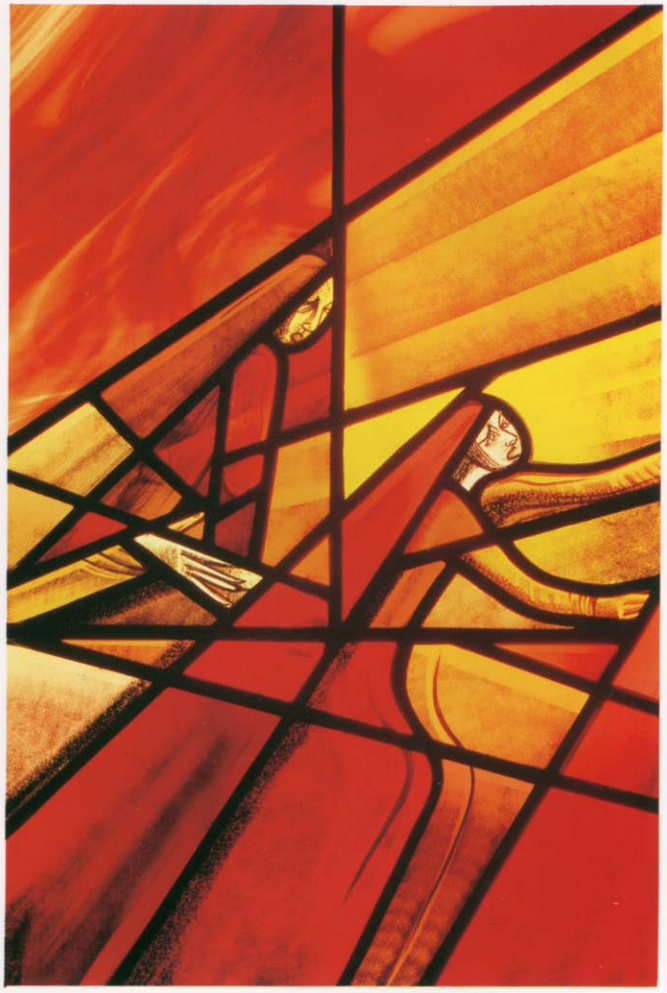
Come, let us build ourselves a city and a tower with its top in the heavens.

W10

主は硫黄と火とを主の所、すなわち天からソドムとゴモラの上に降らせた。

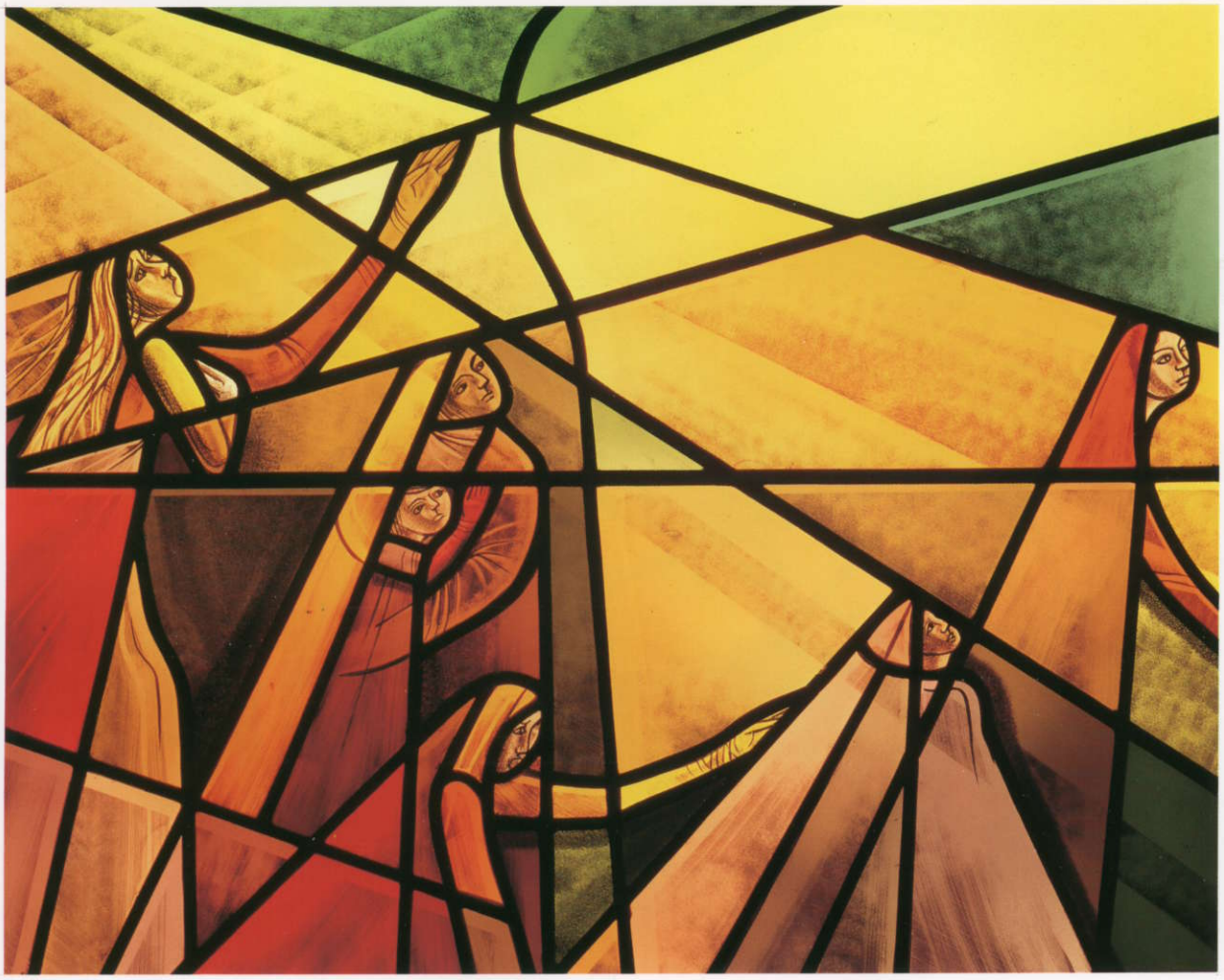
W11

Then the Lord rained down fire and brimstone from the skies on Sodom and Gomorrah.



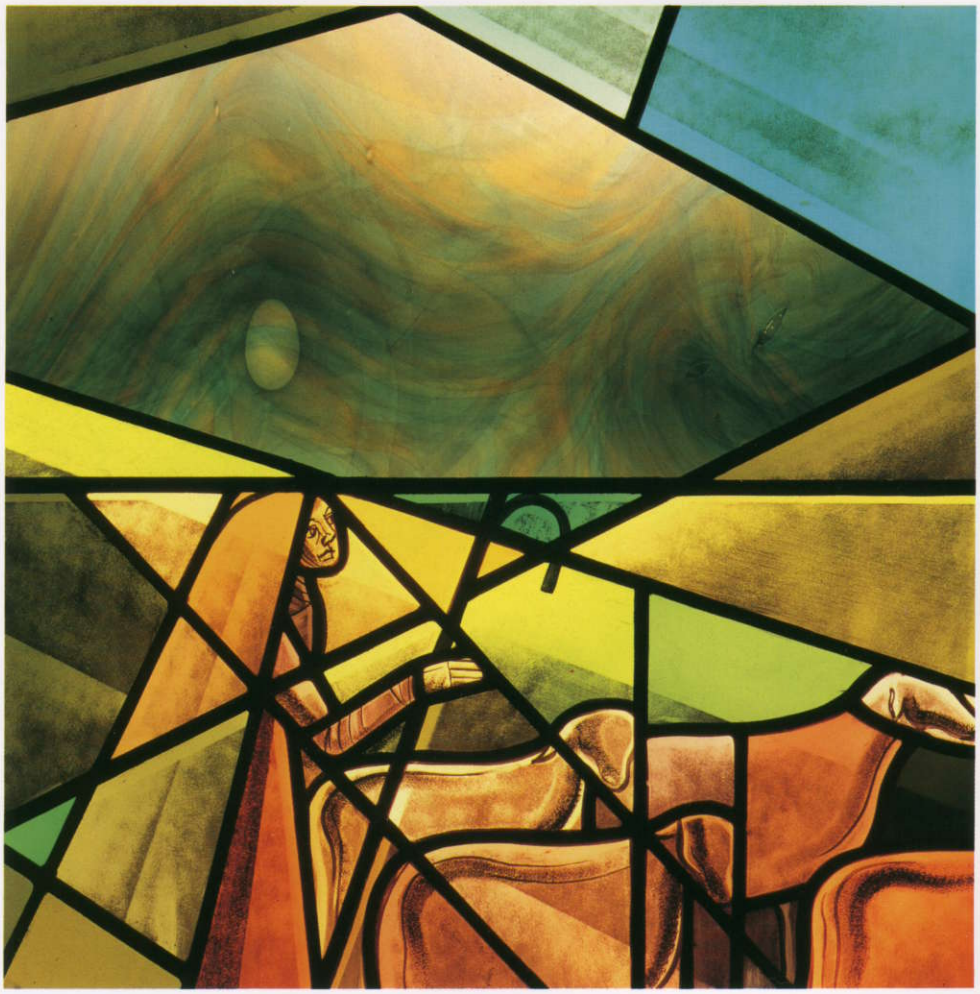
W12

わが助けはどこから来るであろうか。

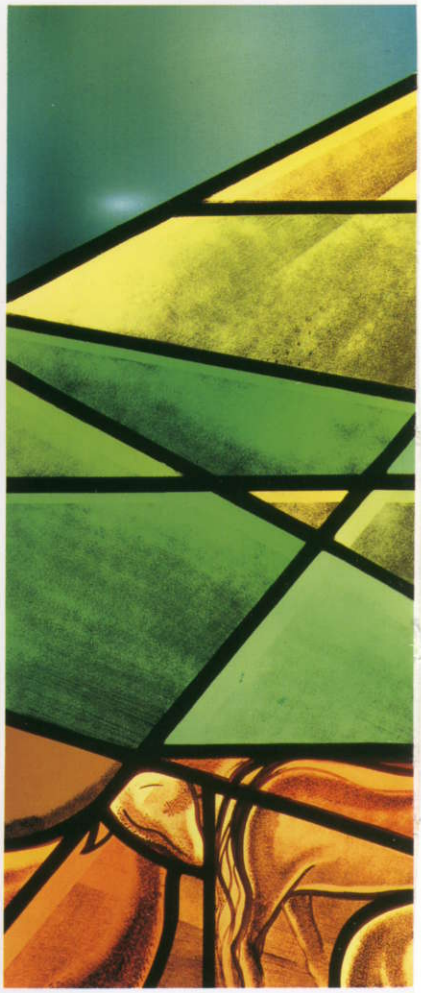


W13

Where shall I find help?

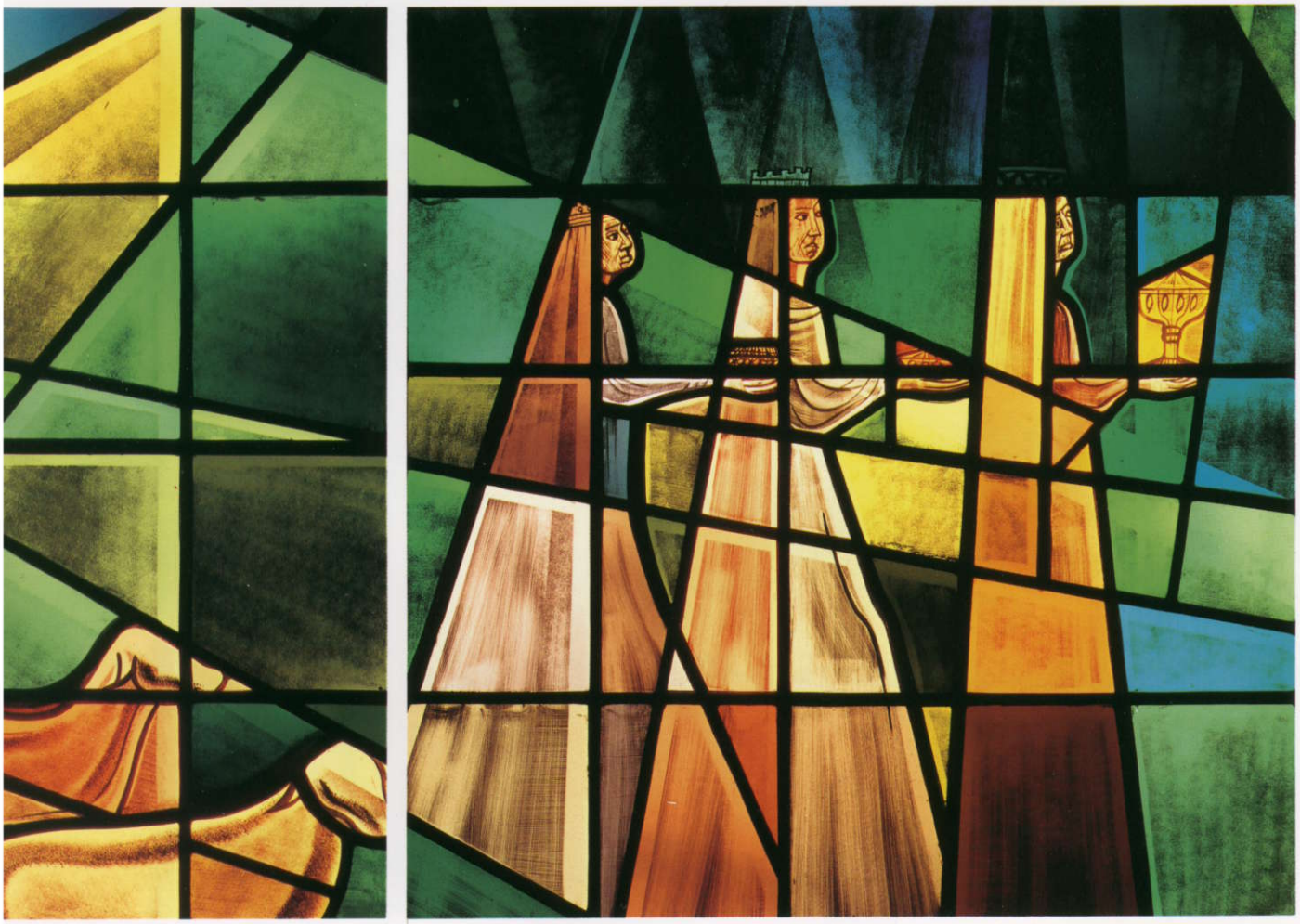


W14



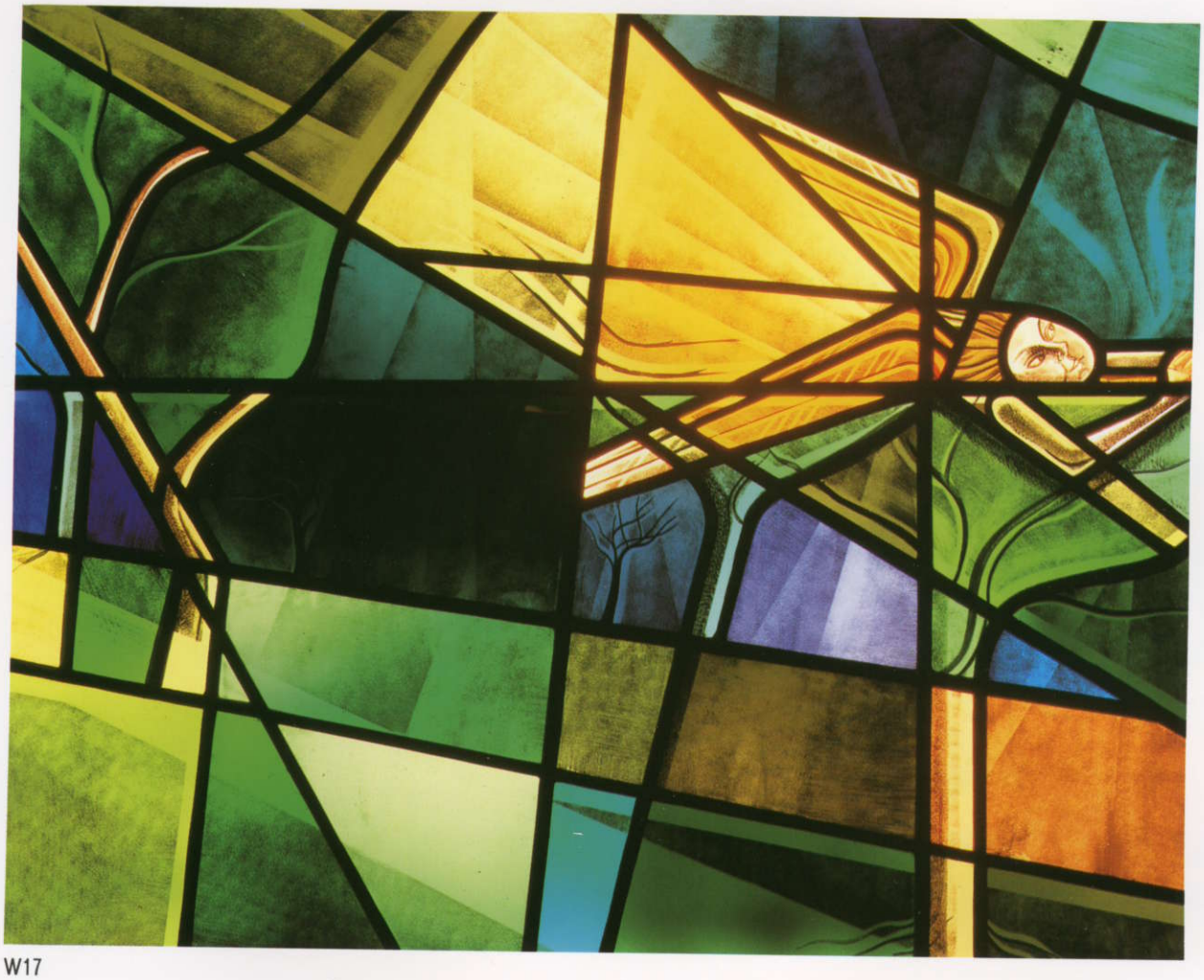
W15

わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みに来ました。



W16

We observe the rising of his star, and we come to pay him homage.

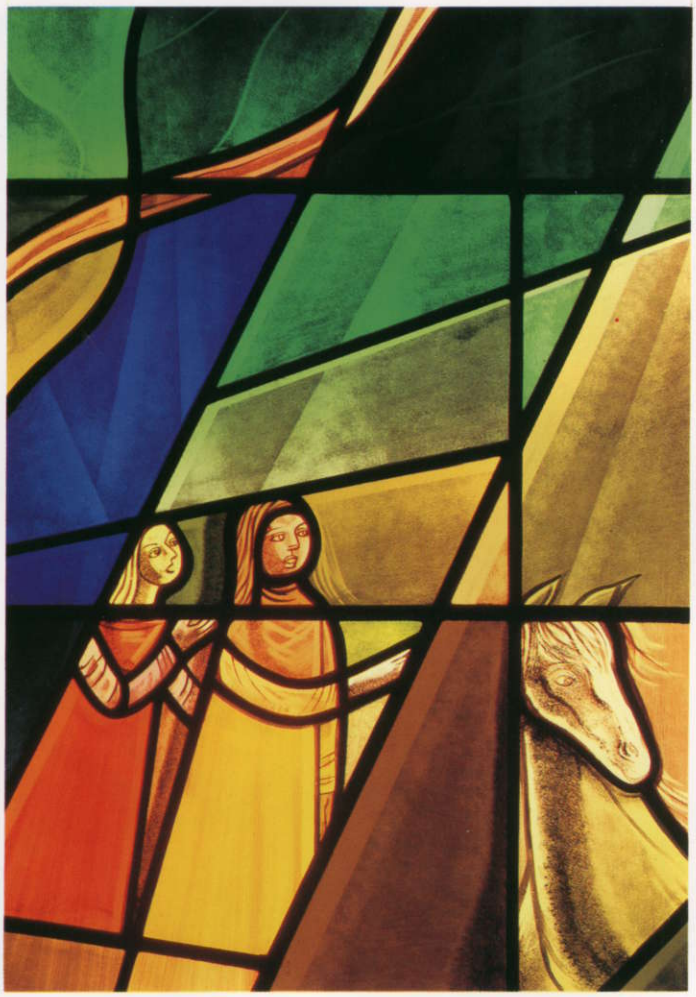


W17

恐れるな、見よ、すべての民に与えられる大きな喜びをあなたがたに伝える。

W18

Do not be afraid! I have good news for you, there is great joy coming to the whole people.



W19

きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。

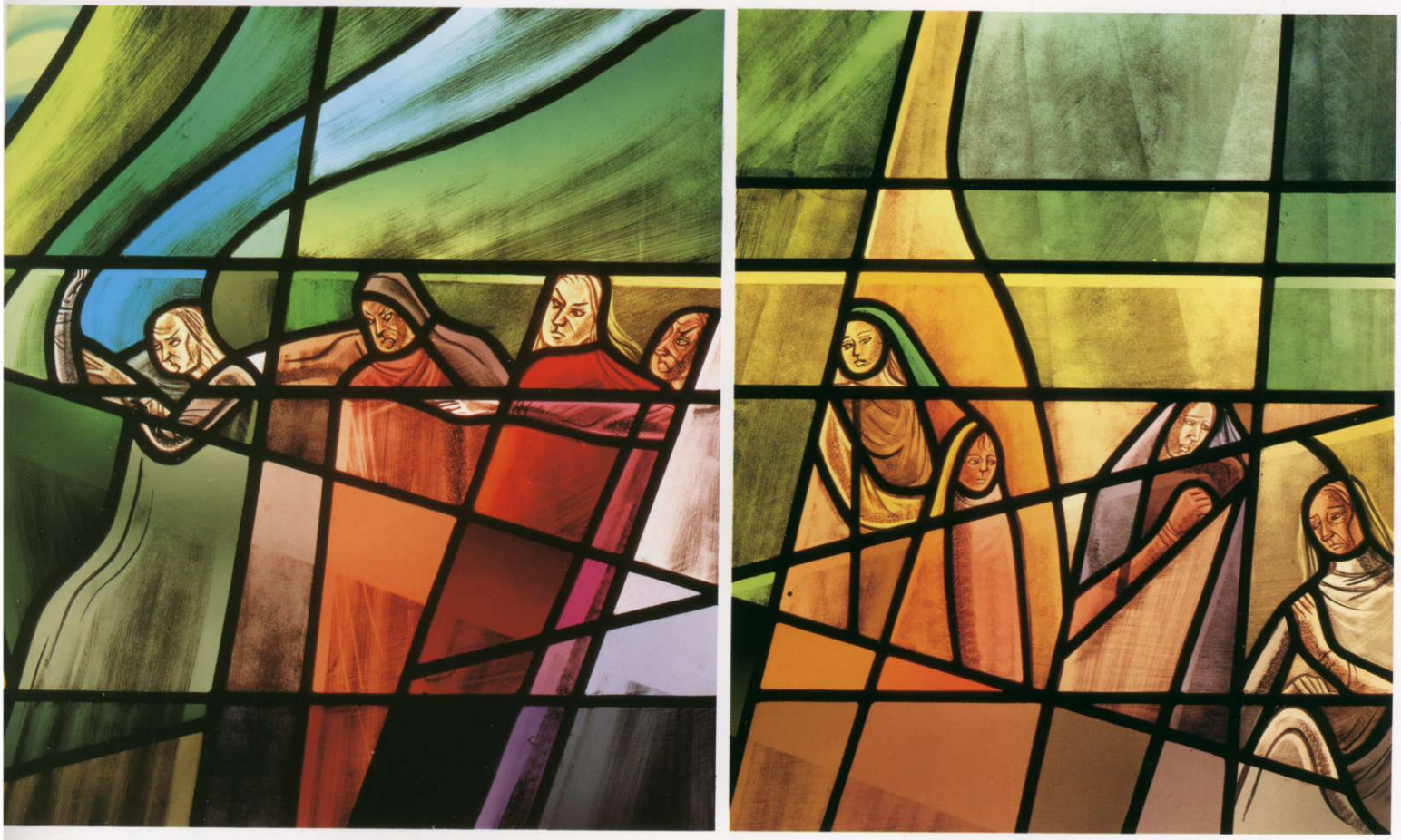
W20

Today in the city of David a deliverer has been born to you.

W21

W22

義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである。



W23

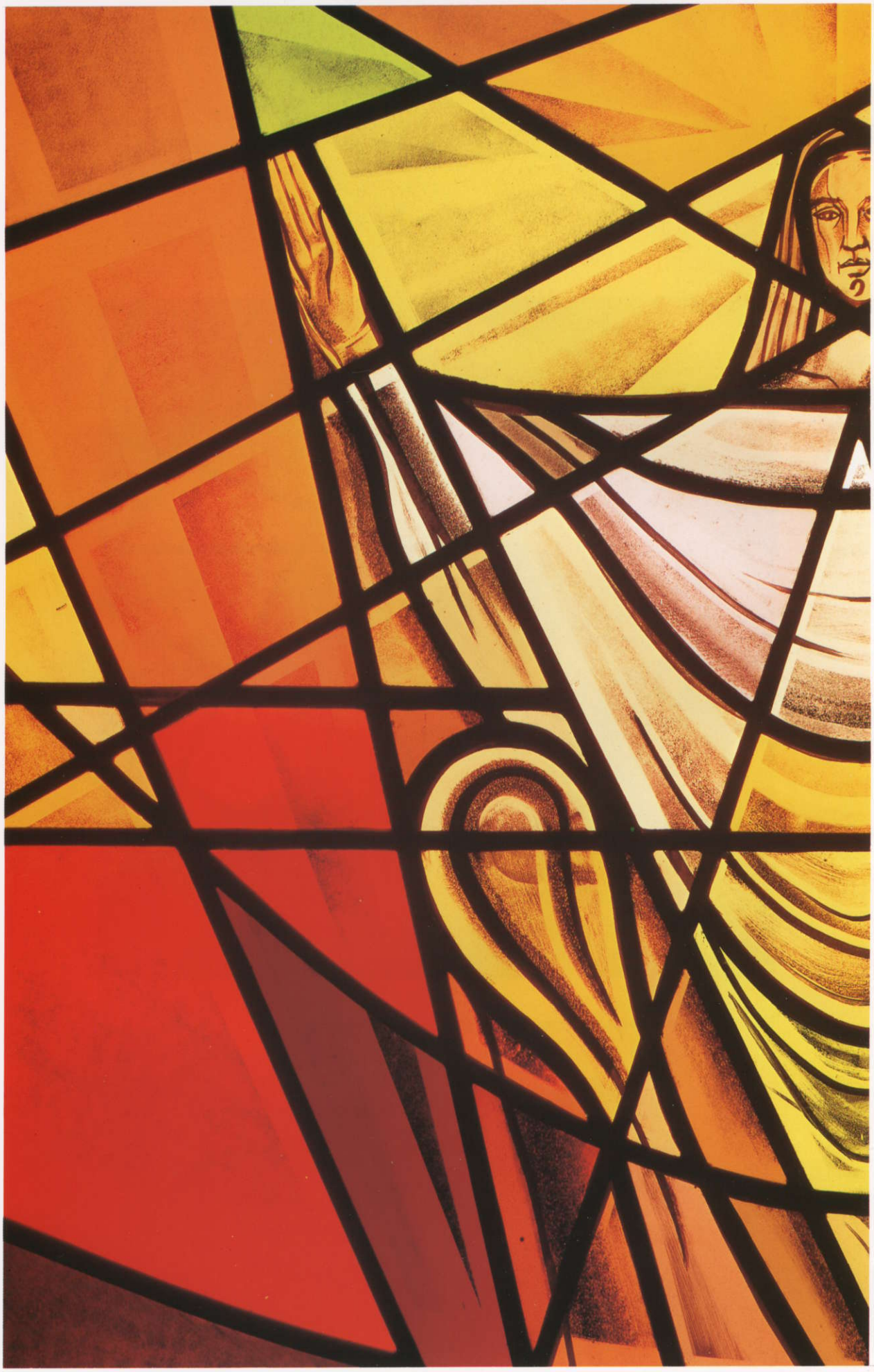
How blest are those who have suffered persecution for the cause of right.

W24

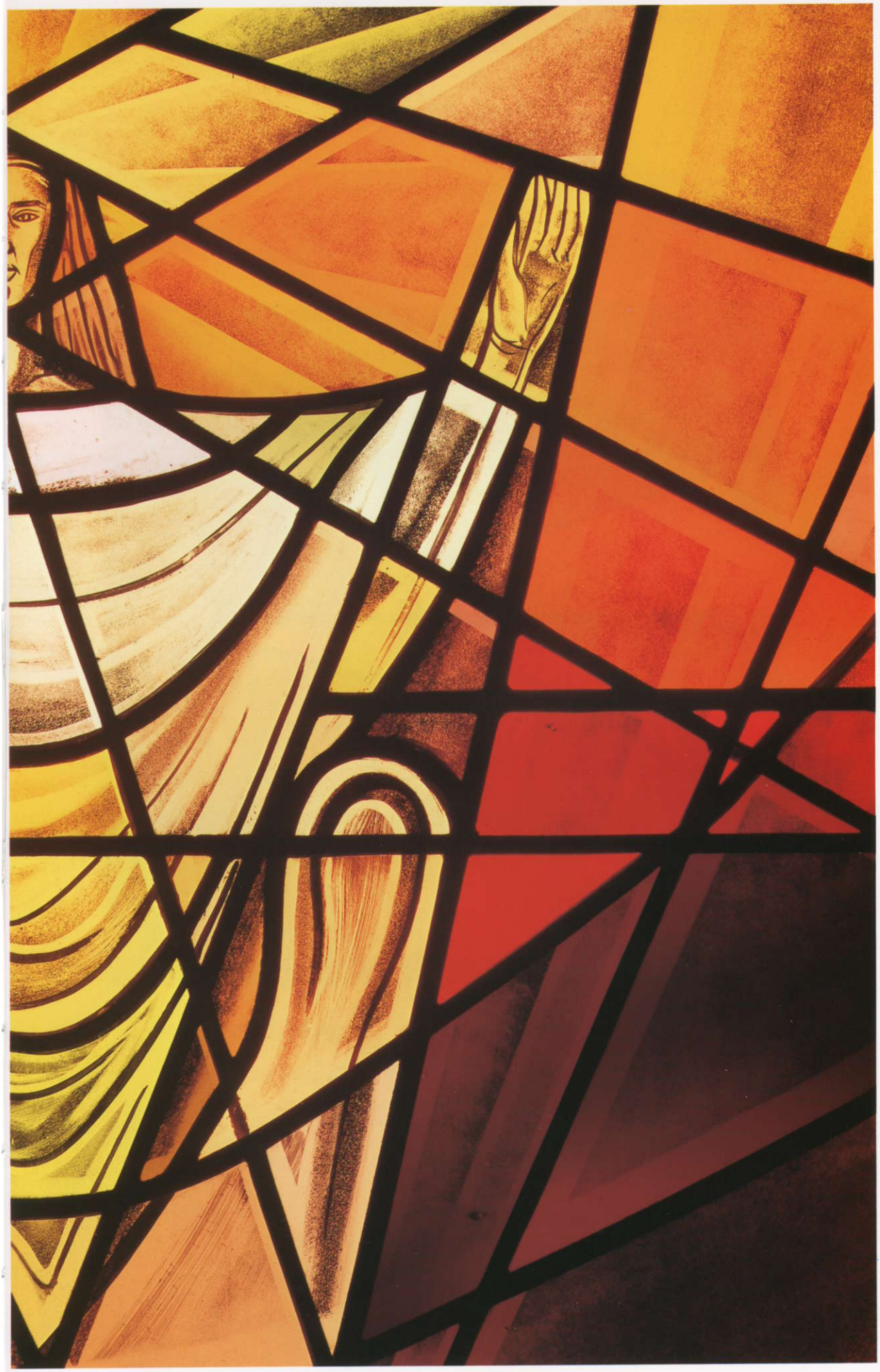
義に飢えかわいている人たちは、さいわいである。

W25

How blest are those who hunger and thirst to see right prevail.



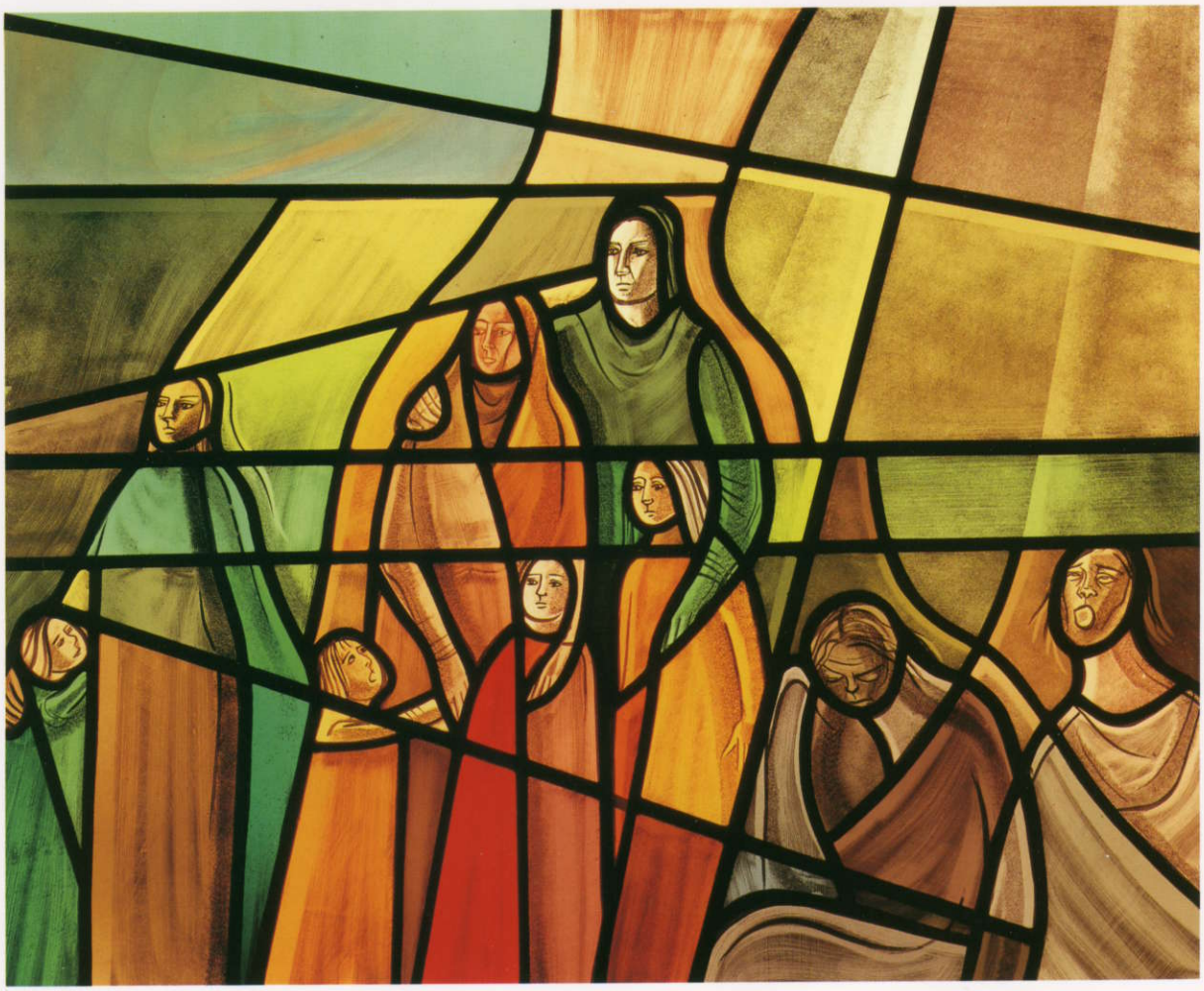
わたしは、よみがえりであり、命である。



I am the resurrection and the life.

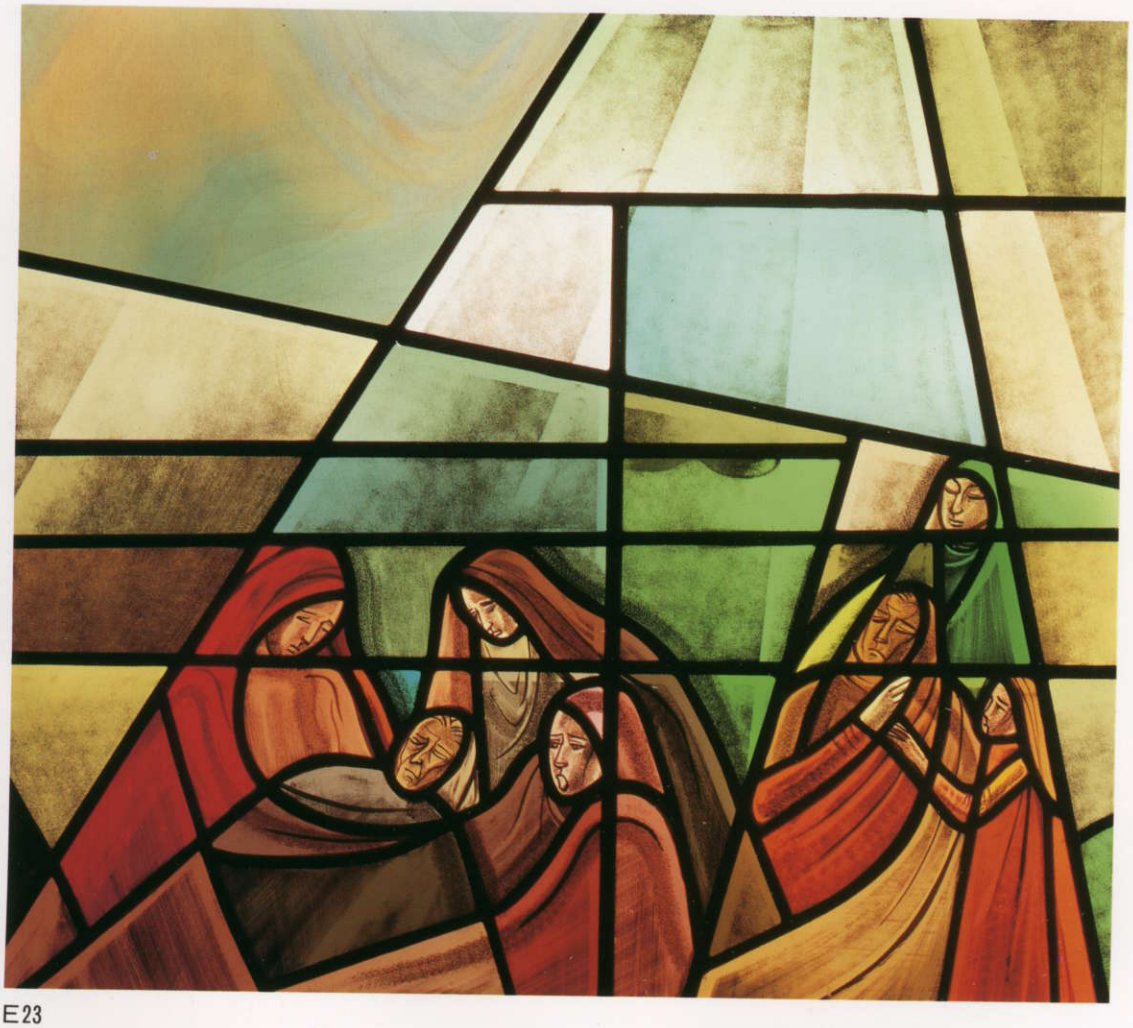
E25

柔和な人たちはさいわいである。



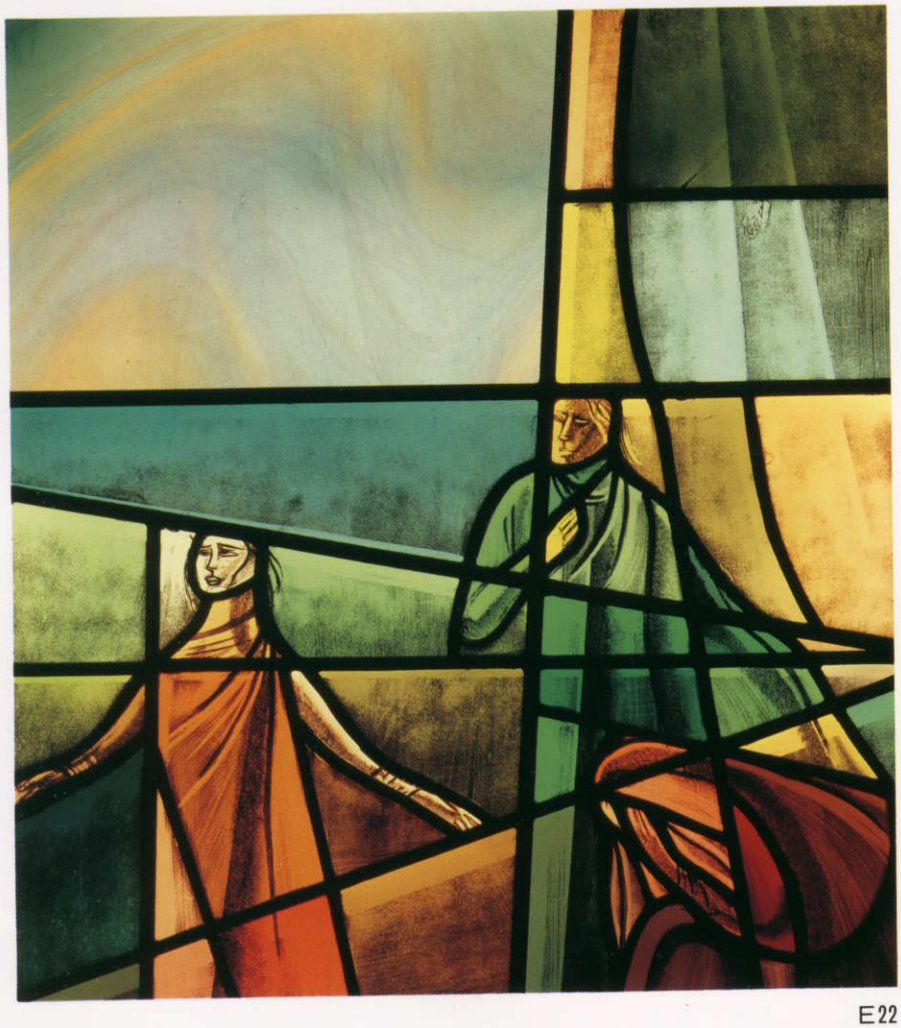
E24

How blest those of a gentle spirit.



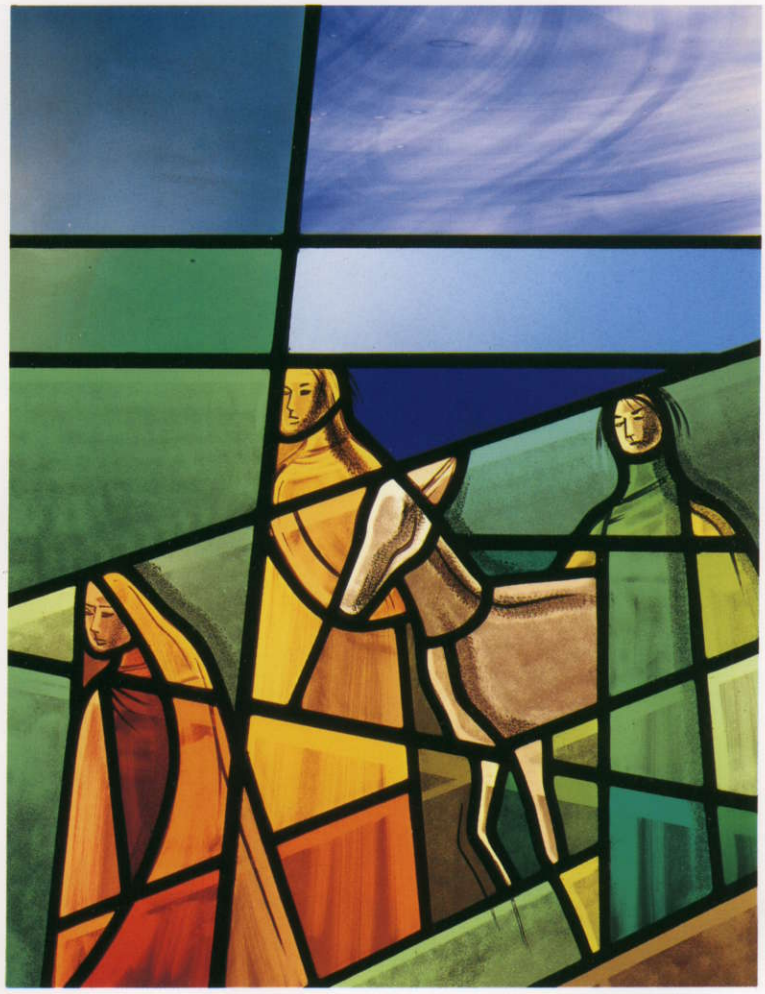
E23

悲しんでいる人たちはさいわいである。



E22

How blest are the sorrowful.

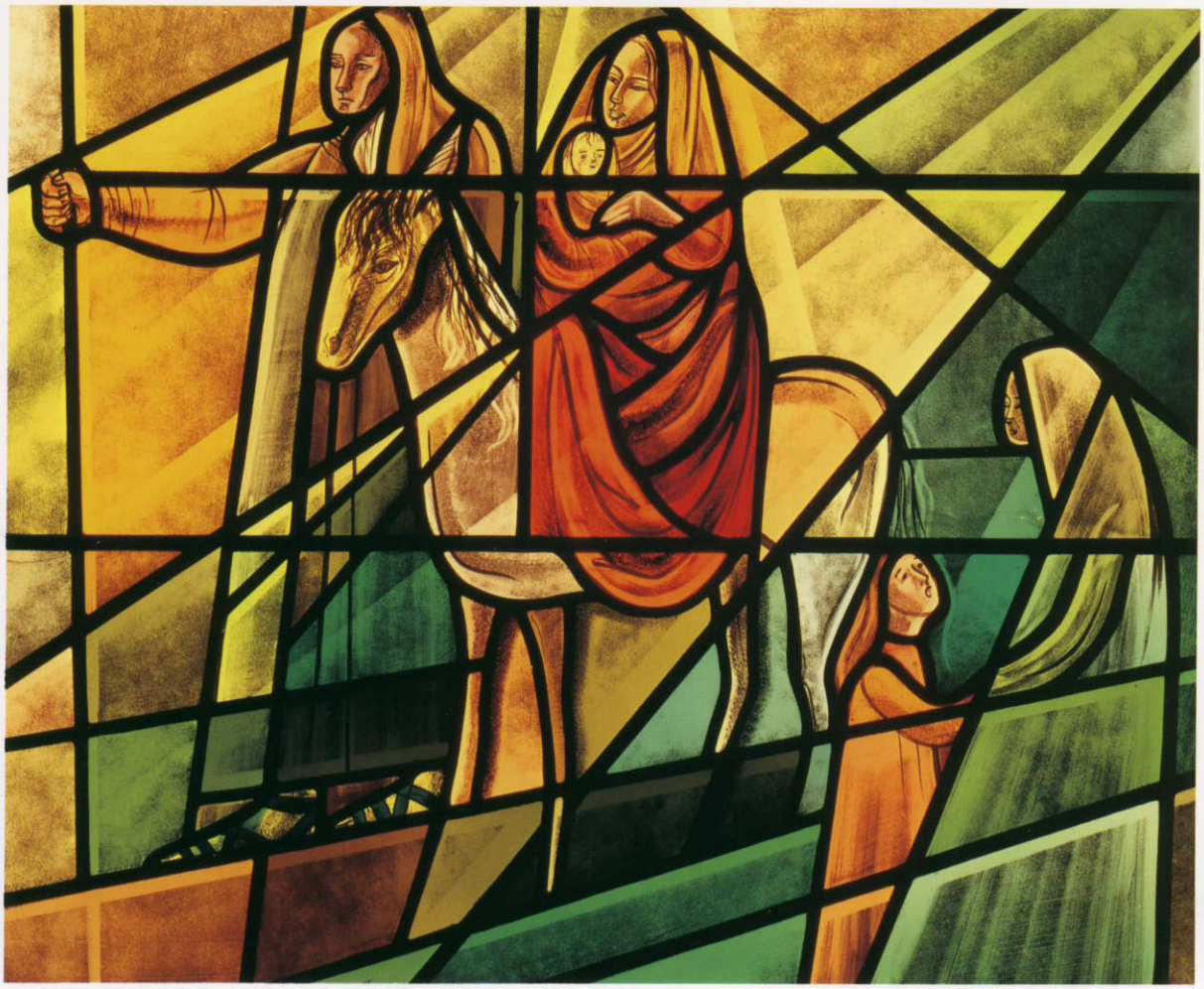


E21

心の貧しい人たちはさいわいである。

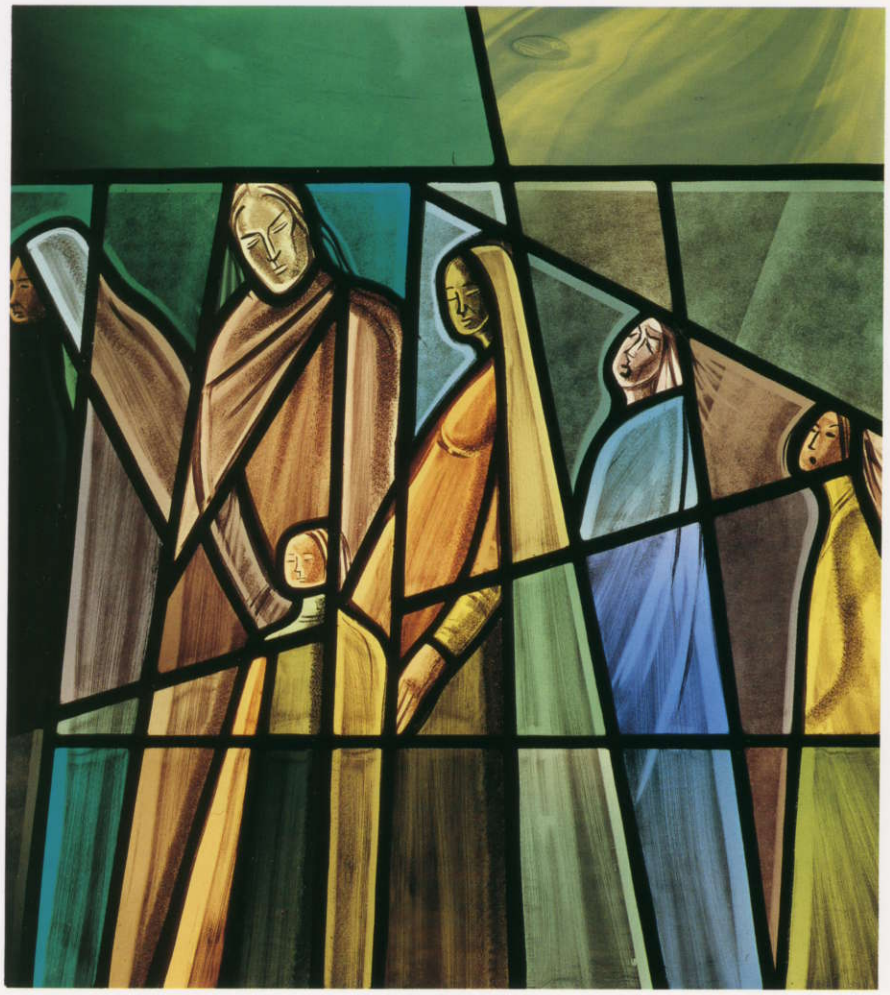
E20

How blest are those who know their need of God.



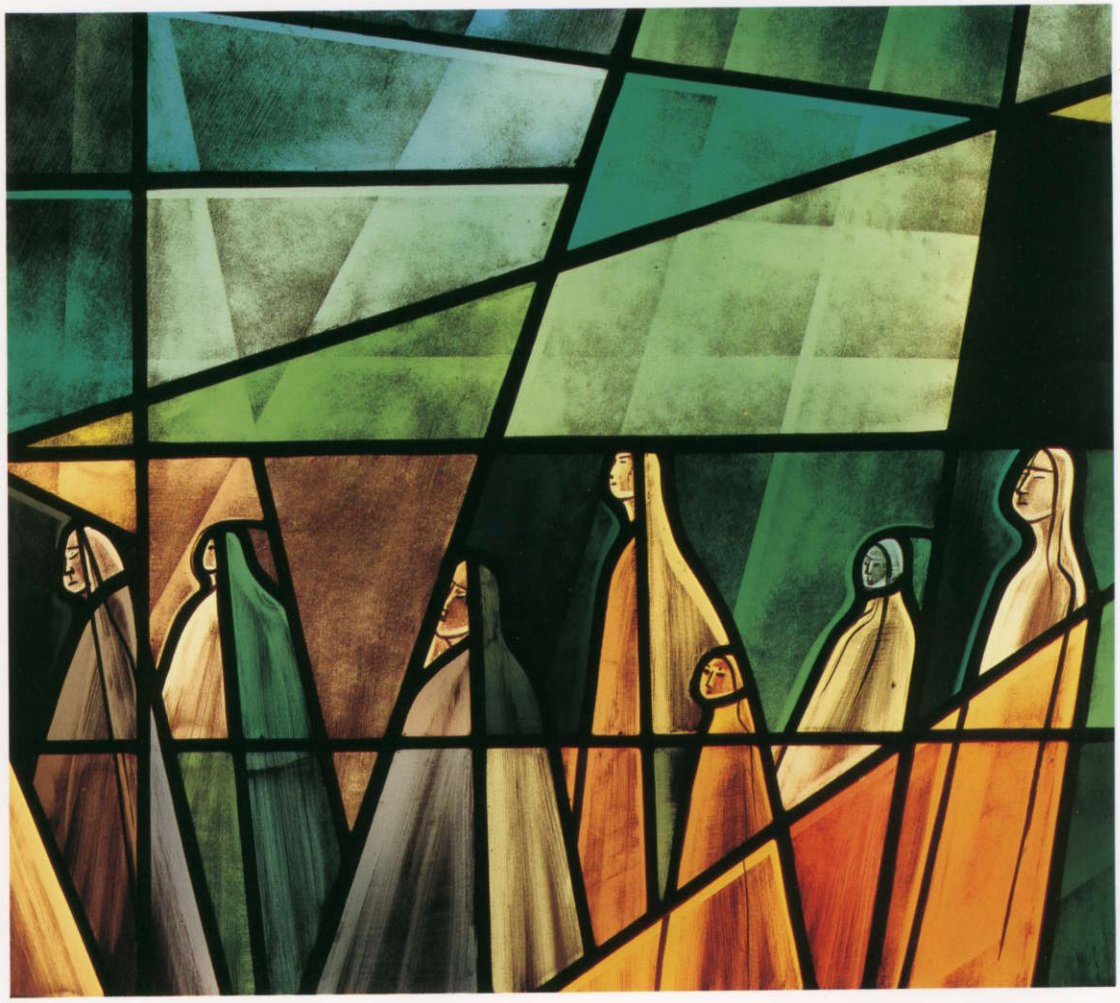
E19

見よ、あなたの王がおいでになる。柔和なおかたで、ろばに乗っておいでになる。



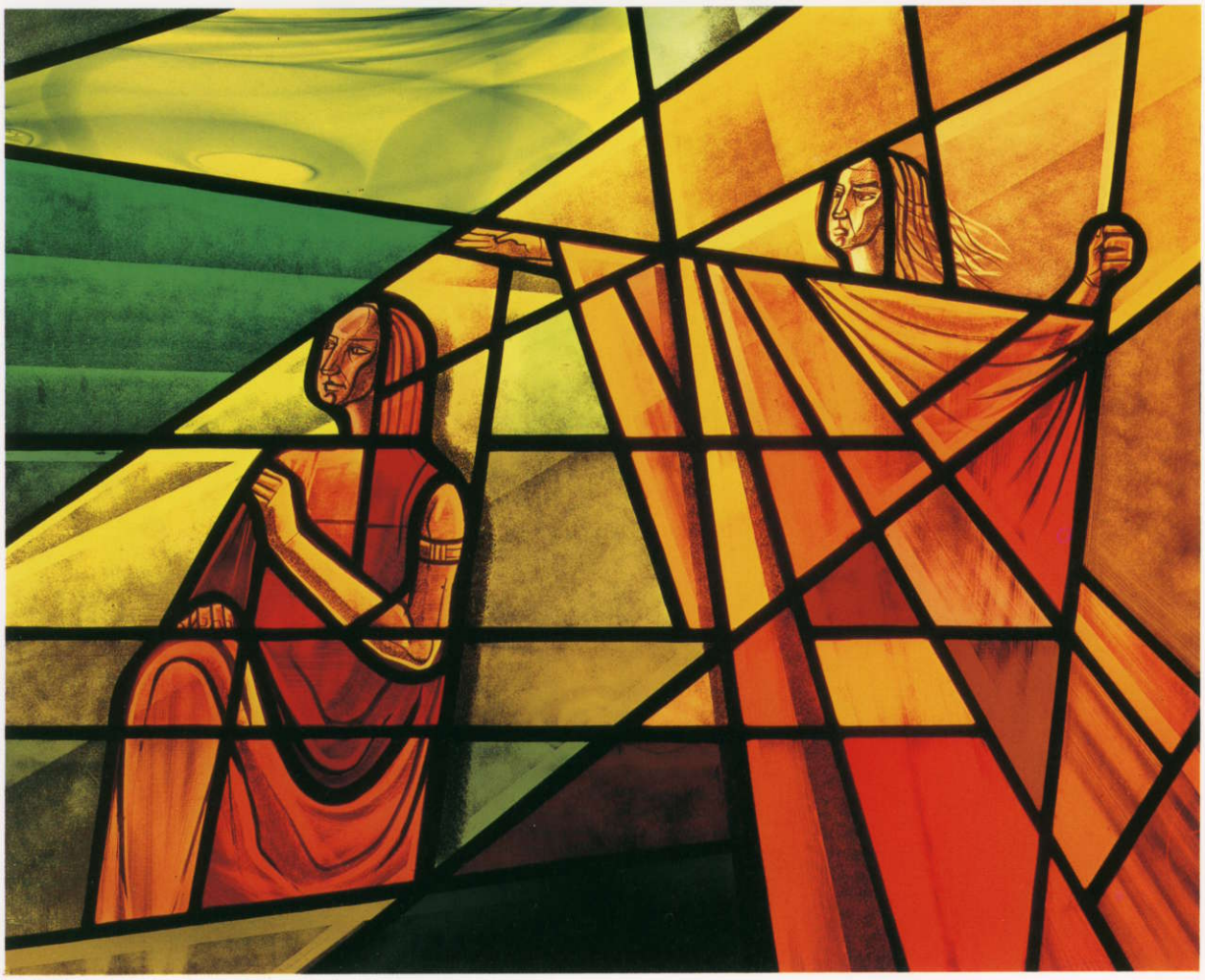
E18

Here is your King, who comes to you in gentleness, riding on an ass.



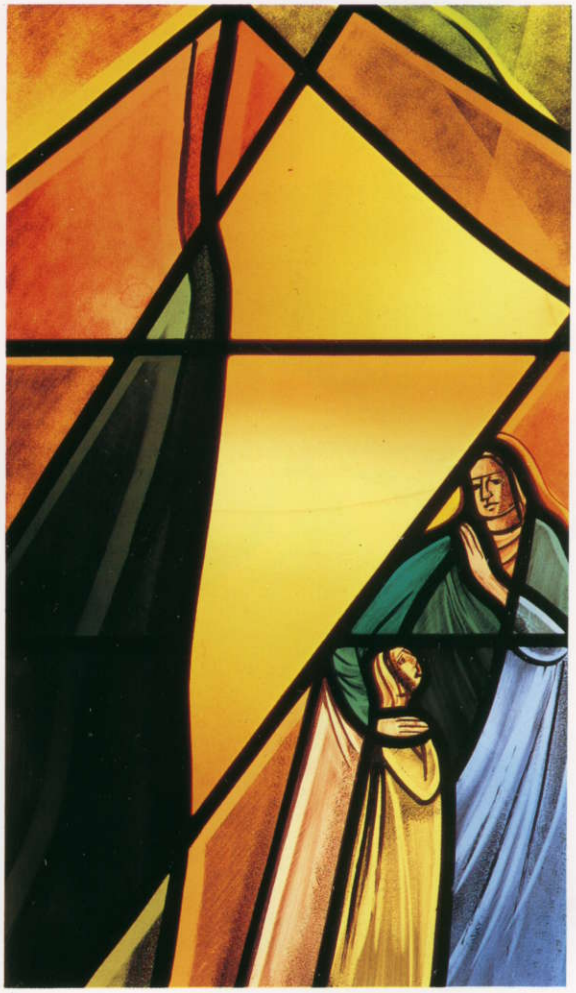
E17

強く、また雄々しくあれ、あなたがたがどこに行くにも、あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない。



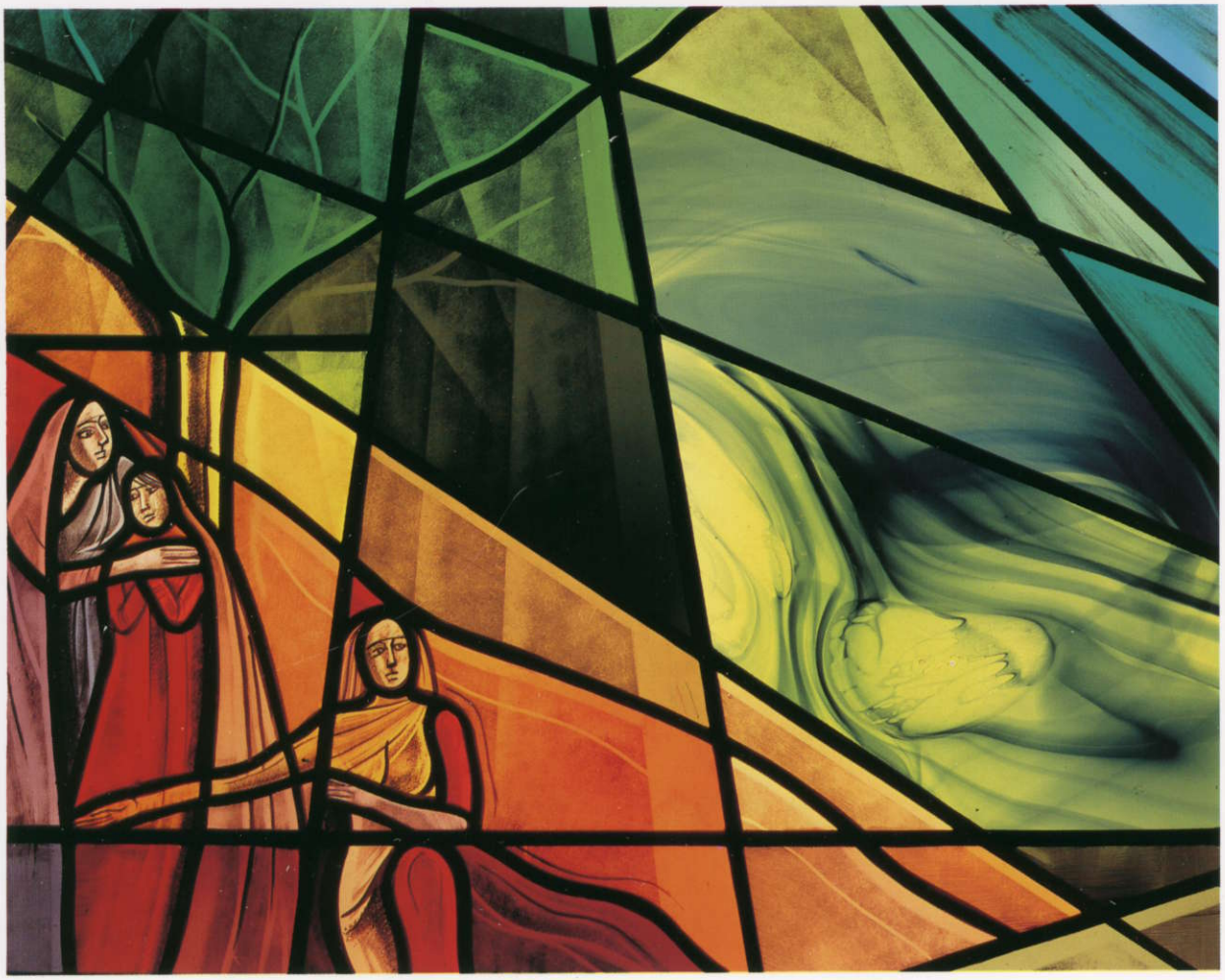
E16

Be strong, be resolute; do not be fearful or dismayed, for the Lord your God is with you wherever you go.



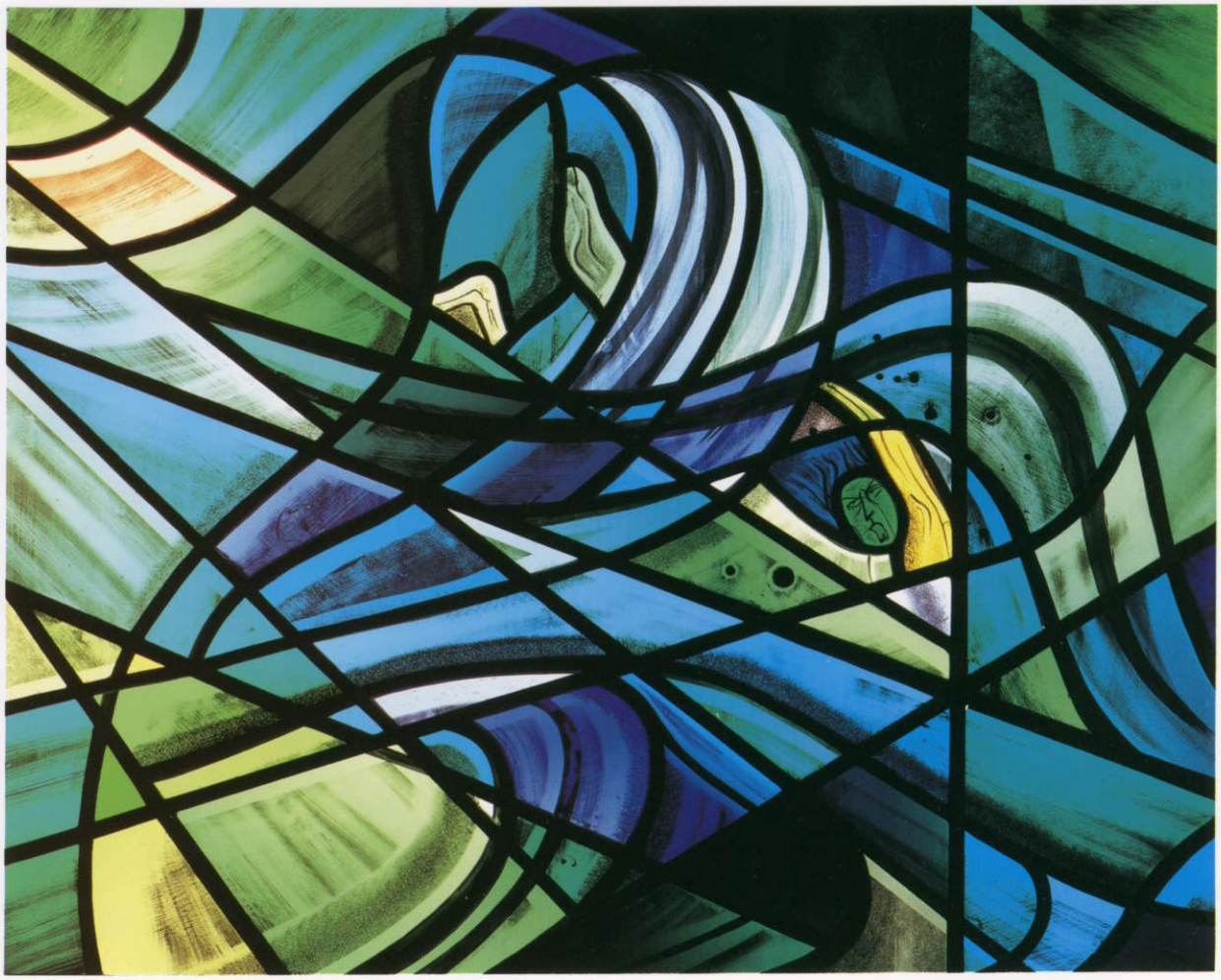
E15

あなたは、贖われた民を恵みをもって導き、み力をもって、あなたの聖なるすまいに伴われた。



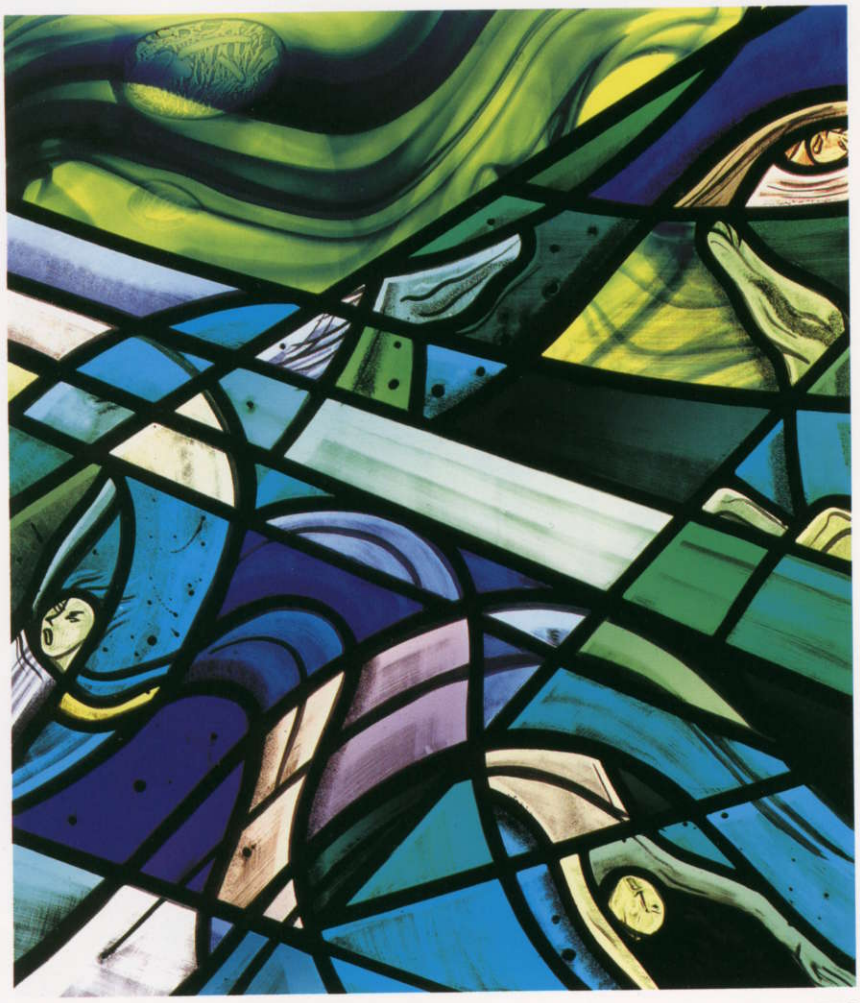
E14

In thy constant love thou hast led the people whom thou didst ransom.



E13

主にむかって歌え、彼は輝しくも勝ちを得られた。

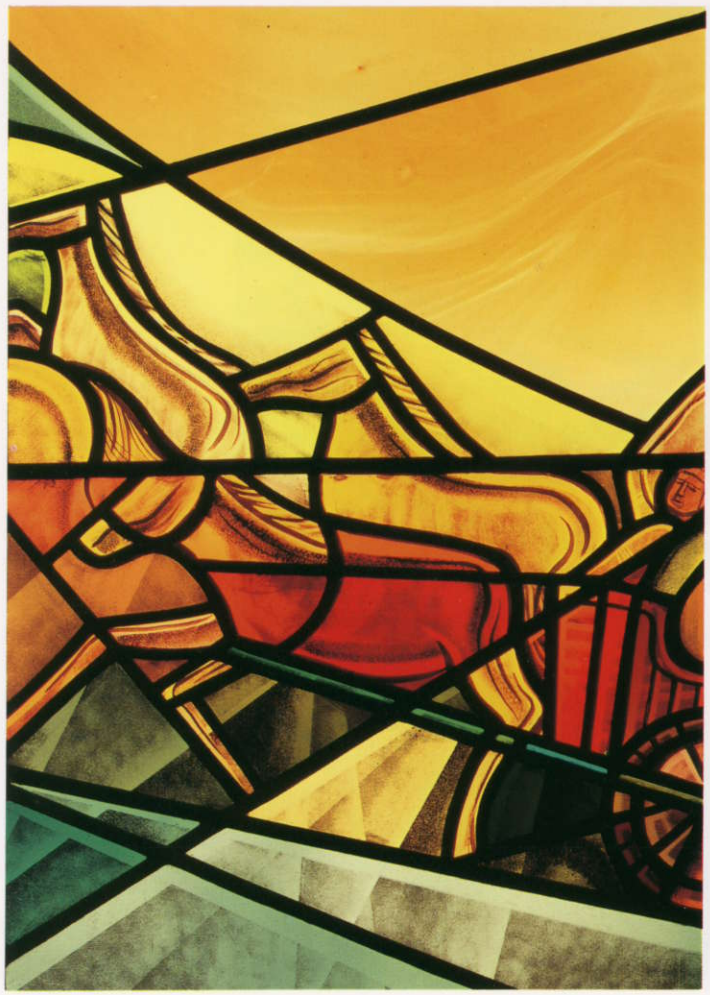


E12

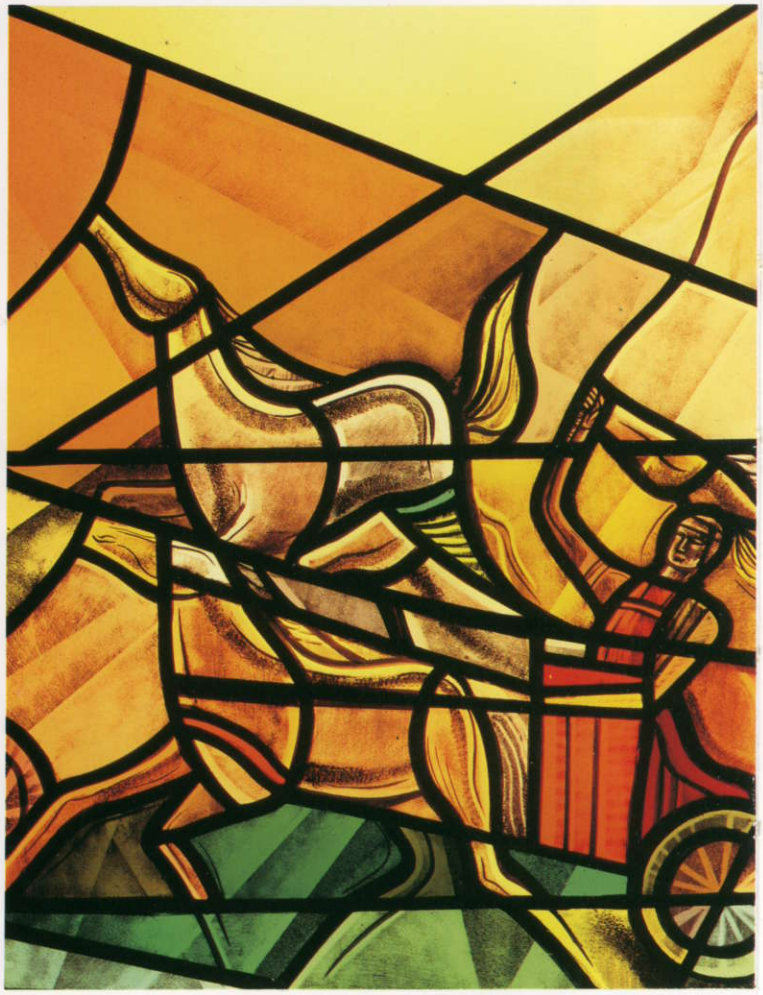
Sing to the Lord, for he has risen up in triumph.

E10

Have no fear and see the deliverance that the Lord will bring you this day.

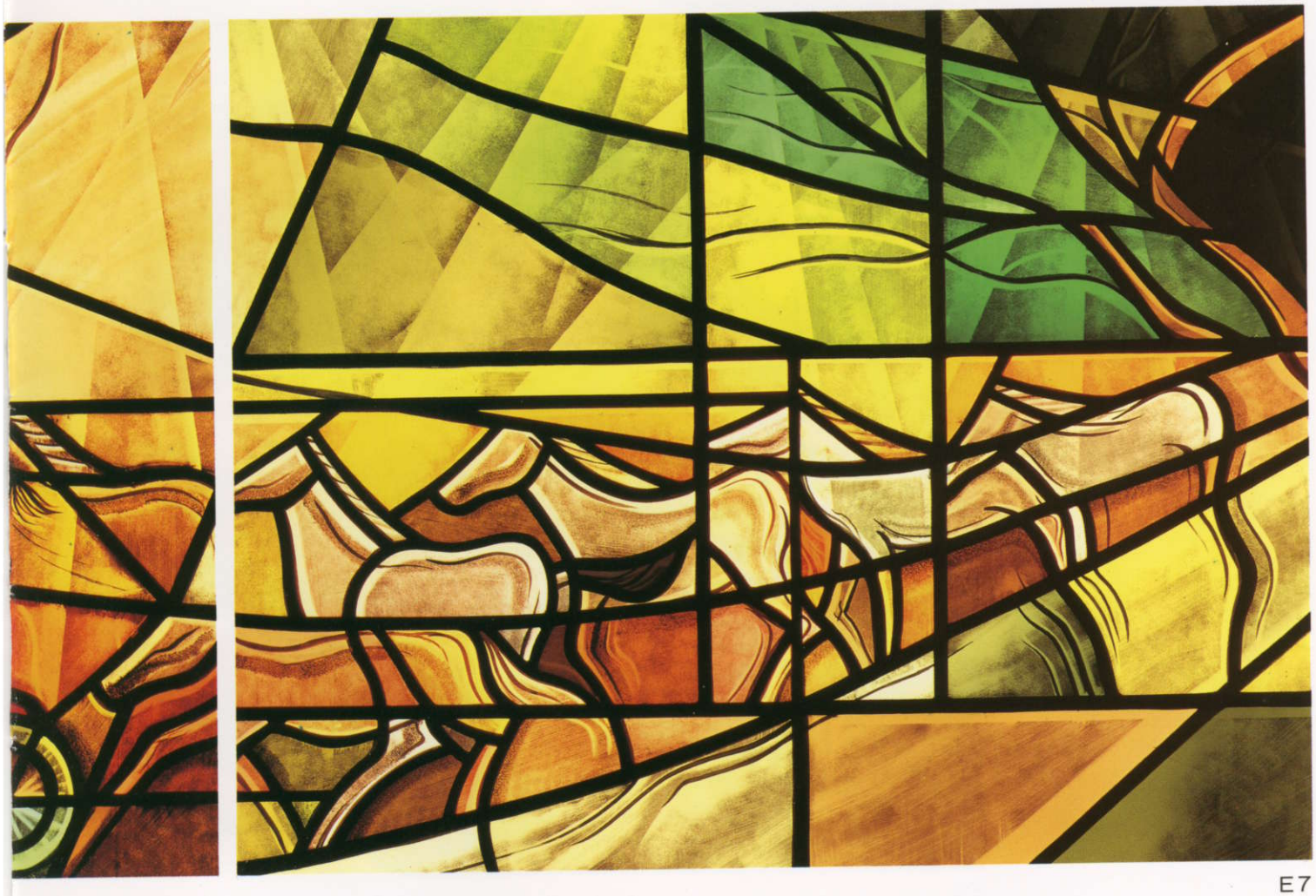


E9



E8

神が造ったすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった。



E7

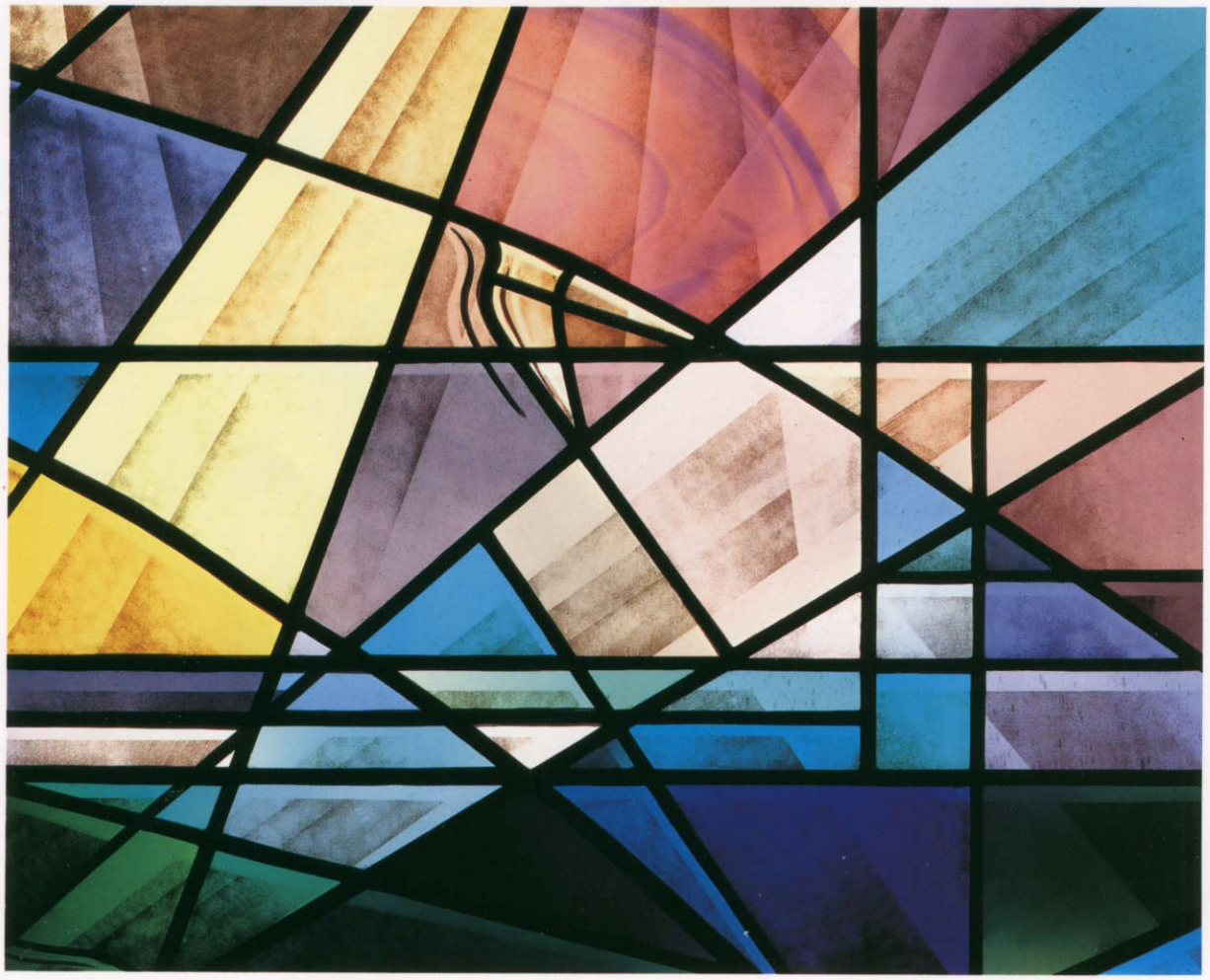
God saw all that he had made, and it was very good.

E6

生めよ、ふえよ、地に満ちよ。

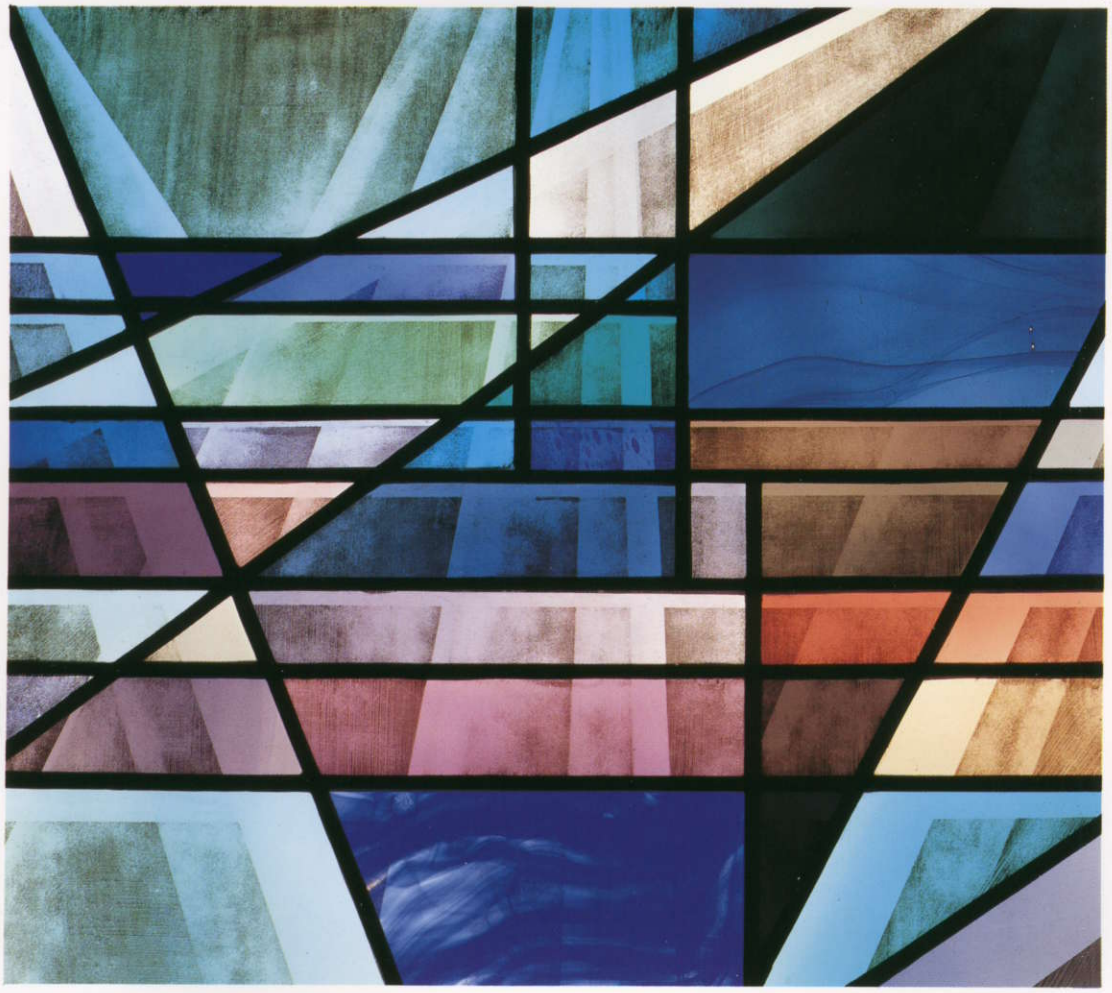
E5

Be fruitful and increase, and fill the earth.



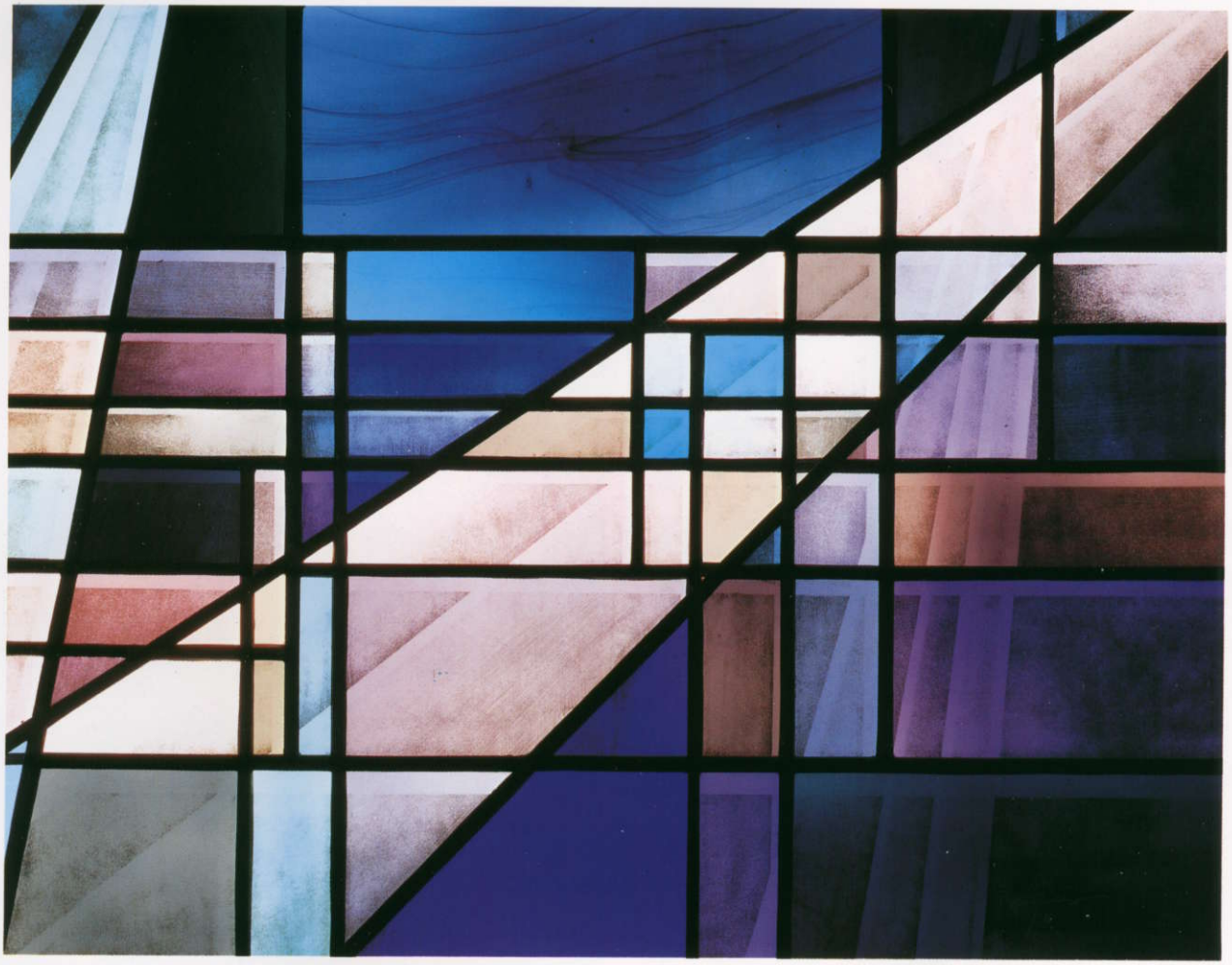
E4

水は生き物の群れで満ち、鳥は地の上、天のおおぞらを飛べ。



E2

神は「光あれ」と言われた、すると光があった。



E1

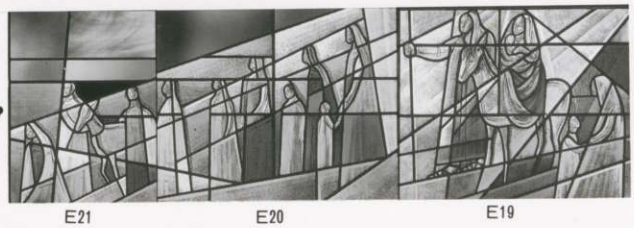
God said, 'Let there be light', and there was light.

見よ、神の小羊。

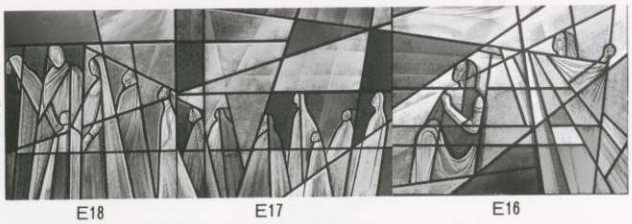
Look, the Lamb of God.

■スティンドグラス配置図(東側)

E24　E23　E22

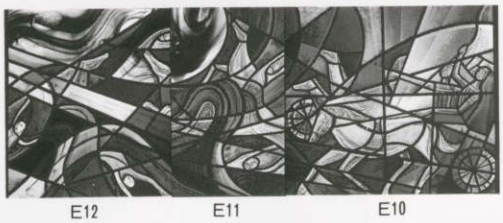


E21　E20　E19

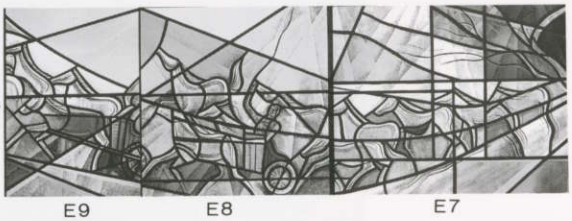


E18　E17　E16

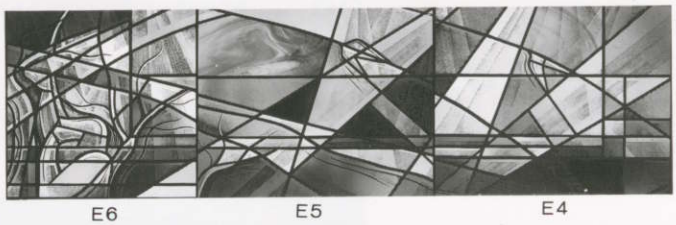
E15　E14　E13



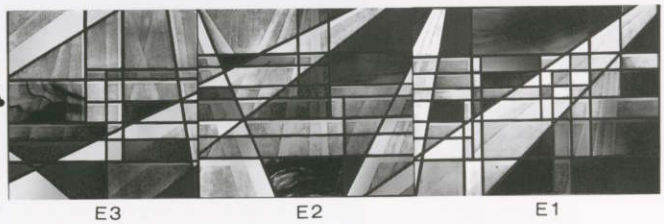
E12　E11　E10



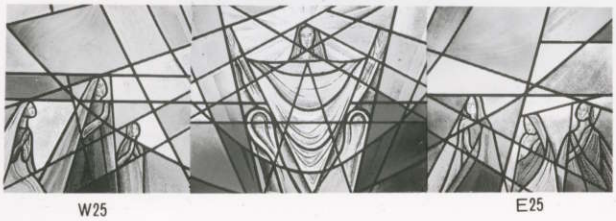
E9　E8　E7



E6　E5　E4

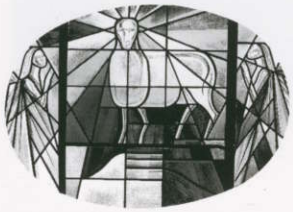


E3　E2　E1



W25　E25

- スティンドグラス高さ　76cm
- スティンドグラス長さ　43.50m
- スティンドグラス設置高さ　10.84m



スティンドグラス長径　1m 55cm
スティンドグラス短径　1m 15cm

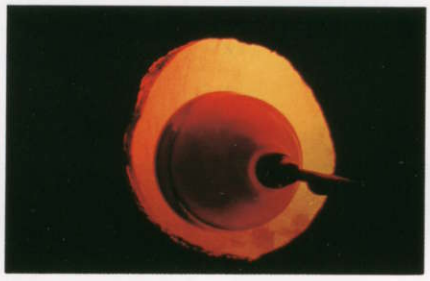
スティンドグラスの素材となる
口吹きガラスの出来るまで――――。

9 筒状のガラスの一部に熱を加えて切り目を入れる。

5 冷却する。

1 中世のガラス吹きをモデルにした、フランスのガラス工場のシンボルマーク。

10 切り目の入った筒を別の炉に入れ、熱を加えて平にする。



6 再び熱を加えて吹く。

2 るつぼの中から鉄のパイプでガラスだねをとり出す。

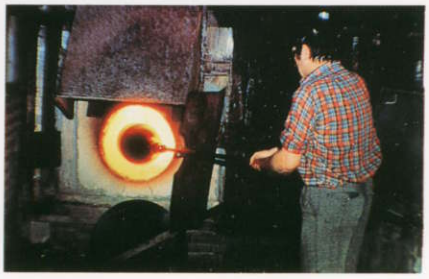
11 平にしたガラスを四角いブロック状のならし棒でよくならし、そのまま長い炉の中をゆっくり動くベルトコンベアーの上にねかせ、徐冷して完全に熱をとる。

7 シリンダー状に長くなったガラスを床にあけられた奈落に向って吹きおろす。

3 パイプを吹きながらガラスの表面に泡や切子状の傷をつけ、ガラスが乱反射する要素をつくる。

12 ガラスの四方を切断し形を整えて完成品になる。

8 充分に長くなったシリンダー状のガラスを台の上におき、筒の両端をカットする。



4 炉の中に入れ、熱を加えて吹く。

スティンドグラスはこうして
つくられました（発想→施工まで）

4　下絵を実物大に拡大しさらに2枚の厚紙にコピーする。これをⒶガラス切り用、Ⓑ鉛入れ用の型紙とする。

1　大切に梱包され、フランスから長い旅をしてアトリエに着いたガラスを一枚一枚ていねいにとり出し、破損の有無を調べる。その時に色見本の番号と照合してガラスに番号を記しガラス棚に収める。

5　ⒶⒷの型紙に通し番号をつけ$\frac{1}{10}$の下絵を見ながら色を選びアトリエの棚番号として整理されているガラス番号をつける。

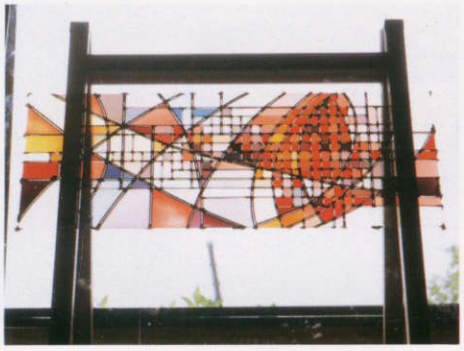
2　作品のテーマにより頭の中で組立てられたイメージを紙に移す作業を始める。

6　型紙のⒶを特殊な二重ばさみで切りはなす。これが鉛線の巾をマイナスしたガラスを切る為の型紙になる。

3　線と色との自由なデッサンからスティンドグラスの下絵に移行させ着色する。

10 型紙Ⓑをその下に敷いた透明な厚板ガラスの上にコントウールの終ったガラス片を並べ、グラグラ煮立てた液体ろうで接着固定する。

7 型紙のガラス色番号に従って棚からガラスをとり出し、その上に型紙を置いて輪郭に沿って切る。



11 ガラス片を接着した厚板ガラスをイーゼルに立てかけて全体の色のハーモニーをよくみる。調和しない色はこの時にとりかえる。

8 切ったガラスの裏表をていねいに酢で磨き実物大の下絵の上にのせる。

12 全体の調和がとれたガラス片の上によく練りあげ、適当な濃度になった顔料を幅広のハケでまんべんなく、すばやくかける。

9 下絵をよくみながら全部のガラスのふちを隅どりし、物の形や必要な線をガラスの上に描き入れる。これをコントウールという。

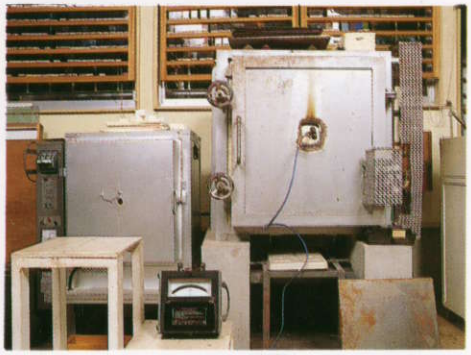
16　充分に熱をとって炉から出したガラス片を型紙の上に並べる。別にL字型の角をもつ板の上に鉛入れ用の型紙Ⓑを敷き、並べられたガラス片を一つづつとって鉛線の中に入れこみ、鉛線と鉛線の交点にハンダづけをする。

13　顔料が乾いてから筆やブラシで調子をつける。光の強弱、コントラスト、濃淡などガラス全体の調和を考えながら仕事をすすめる。この作業をグリザイユと云い、ステインドグラス制作に最も重要な意味をもつ。光を彫りおこし光の演出をする大切な個所である。

17　組み上がったパネルの両面から鉛線とガラスの間にオイルパテを練り入れ、鉛のエッジをとじて余分なパテをとる。それからまず油で磨き次に白木の木粉でガラス面に付着した油をとり、最後にもう一度木粉で磨き上げる。

14　グリザイユの終ったガラス片を厚板ガラスからとりはずし、布で裏面に付着した顔料をよくふきとる。これを石膏の粉、又は耐熱板を敷いた鉄板の上に順序よく並べ炉に入れる。

18　完成した作品はていねいに梱包され、アトリエからチャペルに運ばれる。



15　炉の温度は、外温によって多少異なるが、微妙な温度の変化に気をつけながら5〜6時間焼き、火を止めてから約一日徐冷する。

22 はめこまれたスティンドグラスをコーキングし固定する。その後、固定の状況を調べる。

19 足場の上で作家は設計者、作業員とよく打合せをして下絵に従ってはめこみの準備をする。

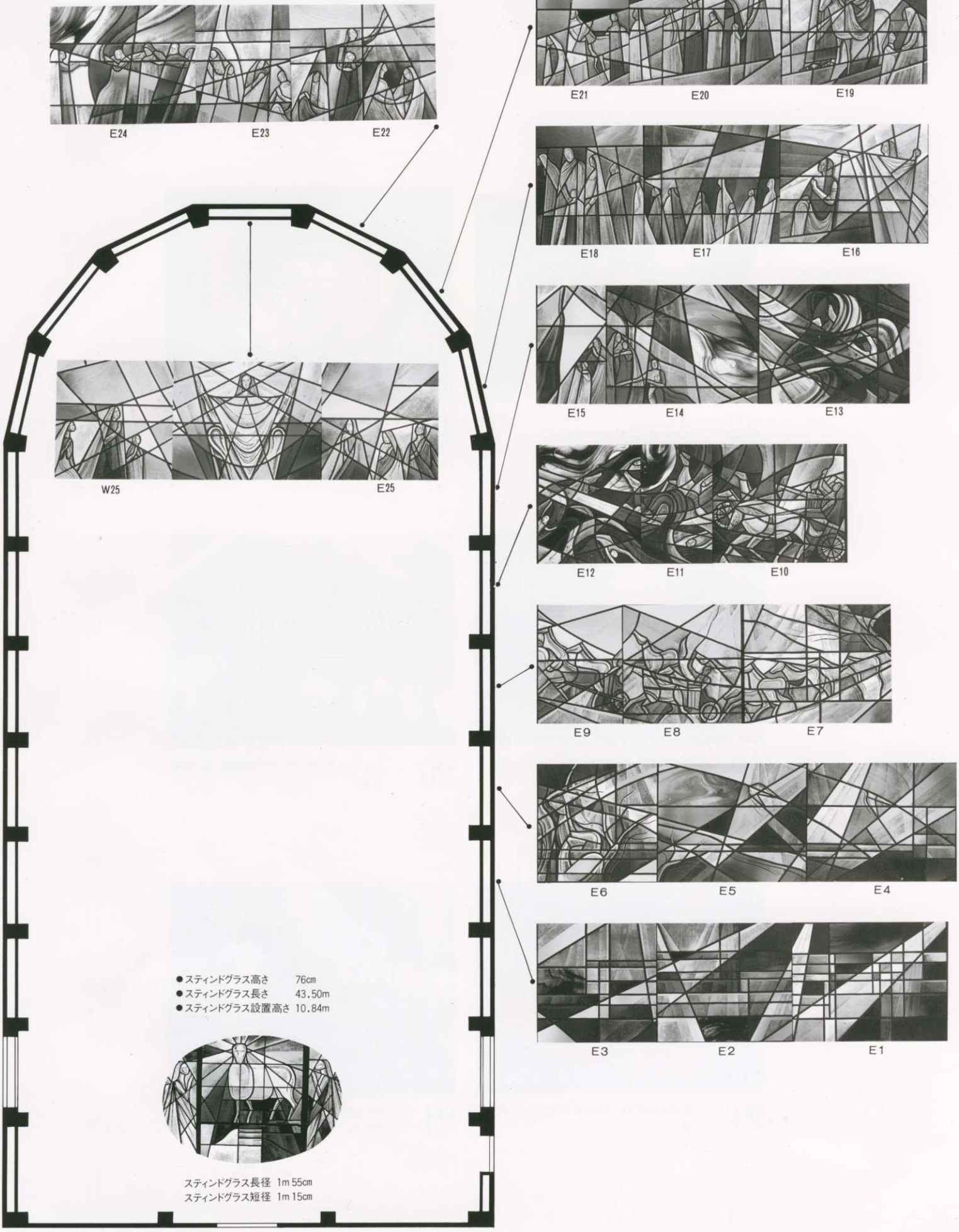
23 全てのスティンドグラスのはめこみを終了、確認する。

20 地上9mに張り囲らされた足場とはめこみ予定の空間。

24 足場をとりはずし、下から見上げたチャペルの全景。

21 スティンドグラスは垂直に持ち、ゆがんだり、たわんだりしないように細心の注意を払って運ぶ。

■スティンドグラス配置図（東側）



スティンドグラス作家
立花江津子

1965 武蔵野美術短期大学芸能デザイン科卒業
1972 ベルギー ゲント市 セント・ルーカス美術大学モニュメンタル科入学
1975 ベルギー ブリュッセルに於て ベルギーの日本人芸術家6人展
セント・ルーカス美術大学首席卒業
1976 神戸 ギャラリーさんちかに於て滞欧作品展
1979 東京三越本店・神戸ヤマハ ギャラリー 大阪三越に於て〝スティンドグラス展〟
兵庫県(半どん)文化賞及川奨励賞受賞
1983 フランス ヴィツシイに於て国際女流芸術家展国際賞受賞
姫路市文化賞奨励賞受賞
1985 ベルギー ブリュッセルに於ける国際女流芸術家展出品
1986 ベルギー シャルルロワ市 国際女流芸術家展出品グランプリ受賞
神戸さんちかホールに於て 国際スティンドグラス芸術作家展出品
1987 ベルギー ブリュッセルに於ける国際女流芸術家展出品

制作にあたって

松蔭のチャペルは私にとって懐しい響きを持っています。スティンドグラスに依る聖書の絵巻物という珍しさもさることながら、光が一日でチャペルを一周する光の演出が初めて試みられ、光との会話が生々と出来た作品でもありました。43・5米という長さは作家の膨大な創造力とエネルギーを要しました。

制作は、日頃聖書を開くことの少ない怠けクリスチャンである自分の生活を反省しながら、聖書の言葉を自分の心に蘇らせ、まず祈ることから始まりました。聖書の世界に身を置くことの心地良さは、創造するという仕事の中に何のさまたげもなく自分を埋没させてくれました。五十五枚のパネルを七ヶ月で制作するというきつい状況にもかかわらず、私にとって身体の疲労をのりこえた精神の喜びがありました。パイプオルガンとの兼ねあいで少々高すぎる位置に設置されましたが、今もチャペルに立つとき、制作が完成して見上げたあのときと同じおもいが又蘇ってきます。そして今はもうすっかりチャペルと一体化したスティンドグラス——。

かって私の手の中にそのぬくもりを感じた——ガラスの一片一片をいとおしく思いおこしながらチャペルをそっと後にします。

松蔭女子学院大学教授
荒井章三

1958 京都大学文学部哲学科(美学美術史専攻)卒業
1963 立教大学文学研究科組織神学専攻 博士課程修了
1964～65 ハンブルク大学留学
1978～79 ハイデルベルク大学留学
著書 「ユダヤ思想」(朝日カルチュア・ブックス)
訳書 G.v.ラート「旧約聖書神学」I,II他

スティンドグラスに学ぶ

スティンドグラスを透過する柔かな光とオルガンから流れ出る音色は、チャペルで祈るわたしたちに落着きと安らぎとを与えてくれます。「祈りは花のように天に昇る」とうたったのはフランシス・ジャムでしたが、この光と音とは、わたしたちの祈りにまさに花をそえてくれるといえるでしょう。

立花さんと出会ったのは、本学のガラス博士棚橋先生を通してでしたが、友枝理事長、黒沢学長のご賢察により、ベルギーの工房で長年研鑽を積まれてきた立花さんに直ちに制作依頼が決定されました。一九八〇年の早春でした。依頼するにあたり、どのようなテーマで制作していただくかについて話し合いがなされましたが、四三メートルという限定された空間に聖書の物語すべてをつめ込むことは不可能ですから、「光と闇」「秩序と混沌」「救済と堕落」を基本テーマにすることで一致しました。あとは立花さんの手に一切が委ねられ、翌年三月、立花さんと聖書との対話の結晶である立派な作品が完成したのです。

私の文章は、「スティンドグラスに学ぶ」という題で一九八一年一二月から八四年一〇月まで十二回にわたって「チャペルニュース」に載せたものです。何かの参考になれば幸いです。

Secundum Gratiam Dei

The Stained Glass
of
Shoin Women's University
Chapel